331158

2

マルクス主義體系

ルイス・ブディン著

山川均譯

マルクス主義叢書 NO.1

伊勢

◎ 甚上ニテ刷ル哉

竹山

ルイス・ブディン著
山川均譯

マルクス主義體系

（マルクス主義叢書第一編）

東京 白揚社出版

LC Control Number

2001 534875

目次

第一章　マルクスと近時の批評家……………一
第二章　唯物史觀と階級鬪爭……………二
第三章　唯物史觀と其の批評家……………三
第四章　價値及び剩餘價値……………六七
第五章　勞働價値說と其の批評家……………一一七
第六章　マルクス價値學說の『大矛盾』……………七七
第七章　經濟上の矛盾と資本主義の消滅……………二三
第八章　資本の蓄積と中產階級の滅亡……………二六八
第九章　無產階級の歷史的任務……………三三八

第十章　社會革命……………………………三五一
第十一章　結論……………………………三九〇
附錄一　唯物史觀と實踐上の理想主義……………三九三
附錄二　唯物史觀と個人……………………四一九

第一章　マルクスと近時の批評家

人類の智的發達の歴史には、幾つかの有力な思想體系がある。是等の思想體系は、各々この歴史に一時期を劃し、各々その時代――その智的生活が、この思想體系の支配を受けてゐたところの――に特徴を與へてゐる。そしてマルクス說――カール・マルクスを以つて主たる代表者とし、その先輩らが常に『科學的社會主義』と名づけてゐる學說體系――は、今や斯ような有力な思想體系の一つとなる時期に到達した。マルクス說は、今ま尙ほその存在の爲めに鬪つてゐる。そしてその鬪ひは、日々に激烈を加へてゐる。けれどもその鬪ひの性質は、たまく此の學說の地位が變化した消息を洩してゐる。マルクス說は最早や、世間から存在を認めて貰ふ爲めに鬪つてゐるのではなく、之に反して、一個の確立せられた學說――唯一の確立せられた學說と云つてもよい――たる地位を保たんが爲めに、一八九四年に『資本論』の最後の卷が現はれてからこのかた占有し來つた地位を保たんが爲めに、鬪つてゐるものである。

今日、マルクス說の批評は、マルクス說の現はれて以來の如何なる時代に較らべても、その分量

に於いても、その猛烈さ加減に於いても、幾分たりとも減退して居らぬ。否な全く反對である。マルクスによつて、彼れの名を以つて呼ばれるこの偉大な思想體系の最初の基礎がおかれてから五十餘年、マルクスの攻擊者が今日のように數多く、今日のように活潑であつたことは曾てない。マルクス說――マルクス說の反對――こそ、苟も近代思潮におくれぬことを以つて任ずる新刊書、小冊子、哲學、社會學、若くは經濟學上の論說などの動力となり、疊句となり、絕えず繰り返へされる樂想（ライトモーチーフ）となつてゐるものである。そして公然若しくは內密に、マルクス說の攻擊を專らとする多くの定期刊行物が發行せられてゐる。云ふまでもないが、之れとてもマルクスと共の學徒との敎義が世界の人心に有力な影響を與へた證據の一つであつて、二十餘年足らず前までは、人間の智的生活の總體から見ればほんの些細なものとして、學者によつて不問に附せられてゐた此の敎義が、今やその進步を阻止する爲めには――成功のほどは甚だ氣遣はしいが――學者の大軍の、不斷の努力を必要とするようになつたのである。

反マルクス的文書の分量ばかりでなく、その調子も亦た、マルクス說の地位の變化を示してゐる。マルクス其人に對する反感的の論調や、思想界に於けるマルクスの地位と、その學說體系の思想發達史上に於ける重要さとを、ことさらに輕視することは、曾てマルクス批評家の多數に共

通な遣り口であつた。然るに今日の反マルクス的文書のうちには、此の傾向は全く無くなつた。否な、今日の反マルクス的文書の著るしい特徴は、殆んど全べての人が、人として又は思想家としてのマルクスに、敬意を拂つてゐることである。ところが、其れよりも尙ほ重要なことは、マルクス說の新しい批評家は、この學說を、その正確を今後に立證すべき出來たてほや〳〵の敎義として取り扱はないで、反つて夙に確立せられ承認せられてゐる敎義として、その全體若しくは部分的の誤謬を立證し、從つて之が修正、增補、若くはその廢棄の必要を主張してゐることである。去りとて、マルクス說によつて取つて代られた學說を、公然辯護することは、最早や何人も敢てせぬところであつて、殆んど全べての人は、マルクスの出現以前に勢力を占めてゐた諸學說に對するマルクス批評の正當なこと、並びにマルクスの諸學說は、それが初めて提出せられた當時にあつては正鵠であつたといふこと――卽ちその當時に於いて利用し得らるべき材料の、妥當な歸納概括であつたといふこと――を明かに認めてゐるのである。そこで彼等の主張は、其の後の發展の結果として、マルクスの學說が不充分な材料を基礎として居つたことが知れ、從つて吾々の現在の知識は、マルクスの敎義中の或る部分の修正を必要とし、若しくば之を制限するような眞理を以つて、增補することが必要であると云ふ者もあれば、又たマルクスの學說體系全體が、間

違つた材料の上に築かれたものであるから、全然廢棄しなければならぬと云ふ者もある。然しながら批評家の多くは、要するにマルクス說の修正の主張以上には出でないから、そこで近時のマルクス批評家の多くを修正派(レヴイジヨニスト)と云ひ、その敎義を修正說と名づけるようになつた。

然しながら近項の反マルクス的文書の最も重要な特徵は、この學說體系全體を、非科學的として廢棄しなければならぬと主張する批評家の著作物である。そして吾々の觀るところでは、是等の著者の著述そのものこそ、確立し承認せられた社會學上の學說としてマルクス說の占め來つた卓越の地位を、確定的に定めるばかりか、更に進んでは、この學說と地位を爭ふに足るほどの新學說もなく、又た之と光榮を分つに足るほどの新學說すらもないといふ事實を、確定的に定めるものである。是等の著書はマルクス主義者に取つて、最も有益な讀みものであつて、私は後章に於いて、此の種の文書を更に精密に吟味するつもりであるが、茲には唯だ、是れだけの事を云つて置きたいと思ふ。卽ち、斯ような近時のマルクス批評家らは、マルクス說は受入れないが、さりとて、彼等以前から行はれてるたところの、マルクス說以外の如何なる學說體系をも、そつくり其の儘は受入れることを敢てせぬ。そして彼等は——云ふに足りないほどの例外はあるが(之に就いても後章に論じる)——社會現象の說明としてマルクス說に取つて代るに足るような、全部

若くは一部分でも著者の獨創に出でた、何等の學說體系をも提出せぬのである。そこで彼等は殆んど全べて、虛無主義ともいふべきものに陷入つてゐる。卽ち彼等は社會科學の存在、否なその可能をすらも否認しなければならね羽目に陷入つてゐる。そこで言葉を換へて云へば、マルクス說はこの領域に於ける（この領域は組織された社會に於ける人類生活の一切に亘り、その社會上智力上の一切の表現を含んで居る）唯一の科學的敎義である。そして此の學說は、同時に此の問題に關する全べての知識を破壞することなしには、到底、破壞し能はざるものである。

尤も是等の著者の爲めに辯じておかねばならぬことは、斯ような虛無主義は、獨りマルクス說を根底から破壞しようとする論者にのみ限らぬことである。虛無主義の傾向は、修正說以上に踏み出さないマルクス批評家の多くのうちにも、同じく發見することが出來る。卽ち修正派の首領たるエドワアド・ベルンシタインはその好適例であつて、彼は曾て伯林に於ける講演のうちに、科學的社會主義の不可能を立證しようと試みたことがある。

勿論この虛無主義は、全べてのマルクス批評家が、同じように唱へてゐる譯ではない。けれども其の批評を、マルクスの學說體系の一部分に限つてゐる人々を除いたなら、この虛無主義は多かれ少かれ、全べての批評のうちに、彼等の批評の意識した根底となつてゐることを見るのであ

る。けれどもマルクスの學說體系全部を問題として居らぬ近時の批評家らは、勢ひ、彼等がマルクス說は倒れたと臆斷した場合にも、之に代はるべき新學說の無い爲めに生ずる空虛を感じない。そこで彼等は、此の空虛のあるといふことにも、この空虛を充すべき責任があるといふことにも心配なしに、陽氣にその路を走ることが出來るのである。

然るにこの學說體系を全體として觀察し評論した批評家は、萬一マルクス說が破壞されたなら、其の跡に殘される痛ましい空虛を感ぜずにはゐられない。そこで彼等は、勢ひ之に代はるべき他の學說體系を求めるが、それは到底力に及ばぬことが知れると、彼等は虛無主義に陷入つてしまふ。斯ようにマルクス說は科學であるか否かと云ふ問題は、やがて一轉して、社會科學は存在するかしないか、又は存在し得べきものかどうかと云ふ問題となつたのである。この事實がマルクス說の批評家によつて、如何に痛切に感ぜられたかは、最も有爲なマルクス批評家の一人であり、且つマルクスの全學說體系は根本的の誤謬であるから、廢棄しなければならぬと信ずる批評家の一人である、パウル・ワイゼングリューン博士の、次の如き叙述によつて知ることが出來る。修正派の運動は、時としては、マルクス說の『危機(クライシス)』と云はれてゐるが、氏はこの謂ゆるマルクス說の『危機』に言及して、『このマルクス說の危機は、廣く社會科學全體に亘る危機を意味する』と云つ

て居る。
以上の如き事實は、是等の新たな批評の光に照してマルクス說を再敍し、そして是等の批評は果してカール・マルクスの學說中、何等かの枝葉の點でも修正し、改變し、または廢棄に至らしめたか、若くは必ずそうした結果に至らしむべきものであるか、またどの程度まで修正、改變、若くは廢棄に至らしめたか、又は必ずそうした結果に至らしむべきものであるかを決定すると云ふ見地から反對論を吟味し、更に斯ような修正、改變、若くは廢棄を必要としたならば、それは全體としてのマルクスの學說體系に、果して影響を及ぼすかどうかといふことを吟味することを、必要缺くべからざる事としたのである。

そして之がまた、近時のマルクス批評家に對して、適當に答へ得る唯一の途である。之に反して、彼等の筆になる書籍や論文の一つ〳〵に對して、各々別々に答へることは、絕對的に不可能の事であり、若し出來得たとしても、精力の浪費である。何故ならば是等の文書は、同一の事の反復に過ぎないか、若くば事實に關する同じ獨斷や同じ推論を基礎とする部分が頗る多いからである。

それかと云つて、是等の著者のうちの一人を捉まえて全運動の典型と見倣し、その議論を分析

し、之によつて全運動を評價することも、同じく不可能である。その理由は、是等のマルクス批評家らは、飽くまで孤立割據の狀態にあるから、全ての點で一致する者は二人と見出だせぬ。彼等はめい〳〵、自己獨特の論步、少くとも自分だけでは自己獨特と考へる論步を辿り、自己獨特の結論を抽き出して居るばかりでなく、是等の議論なり結論なりは、互ひに調和すべからざるものであつたり、しば〳〵互ひに矛盾撞着する傾向を有するものである。其ればかりではない。彼等はマルクス說とは何ぞやと云ふこと、即ちマルクスの學說體系の本質は何であるかと云ふことに就いて、互ひに一致せぬことも屢々である。そこで各々のマルクス批評の桶は、めい〳〵、自分の底の上に立つてゐるばかりでなく、各人めい〳〵に、自己一流のマルクス說を造り上げてゐると云ふのが、マルクス說批評家間に行はれてゐる通則のようである。是等の批評家中の或る者、いふ迄でもなく安値な種類の者になると、自分勝手なマルクス說製造といふ斯ような方法が、奇々妙々な茶番になつてゐる。斯くて勝手にマルクス說が造られてゐるが、そのマルクス說たるや、極めて容易に論破し得るように出來上つてゐる。但し彼等のマルクス說は、それが起きようが、倒れようが、何人も一向頓着せぬほどに、それほどカール・マルクスとその學徒らの敎義とは、雲泥の相異のあるものである。

斯ような事實は、是等の批評家中の一人を捉まえて、全體の典型と見做すことの公平でないこと、また全く不可能事であることを示すものである。若し答辯を與へるといふことになれば、彼等は各々、別々の尋問を要求する權利がある。現にこの要求は、マルクス説の一批評家によつて、明白に提出せられてゐるところである。即ちこの批評家は、マルクス主義者は連帶責任者と見做すことが出來る、なぜならば、マルクス説は輪廓の明らかな一個の思想體系であり、敎義の本體であつて、この學派に屬する先輩は、全べて之に加盟するものと見做されてゐるからである、然るにマルクス説の反對者、殊に虛無主義的傾向を有する反對者は、如何なる學派にも屬せず、如何なる特殊の學說體系をも信ぜず、一言にすれば、一人一黨の一團であるから、從つて一人一黨として取り扱はれなければならぬ、と論じてゐるのである。

そこで『反マルクスの說文書』——マルクス批評の全體を包括するに足る唯一の廣汎な名稱——に組織立つた評論を加へることは、不可能といふことになる。從つて本章に於いては、單にその主要な特徵を約說し、最も重要な著者を列擧するに止どめておき、全べて個々の著述家または個々の批評に對する論議は、マルクスの學說體系中、是等の批評に關係した部分を論題とする後章に讓つておく。

一八九四年にカール・マルクスの主要著作たる『資本論』の第三卷が現はれたことは、勢ひマルクス批評熱の復活を來たしたが、この復活は決して一般的のものではなく、唯だ一つの除外例たるボエム・バワークの論文『マルクスと其の體系の終焉』を除くの外は、『資本論』第三卷の公刊に續づいては、何等の重要な批評も直ぐには出なかつた。そしてボエム・バワークの批評も問題を取り扱つた方法から見れば、實は新式のマルクス批評よりも、寧ろ舊式のマルクス批評に屬するものである。マルクスの經濟學上の教義を取り扱つたボエム・バワークの論文に續づいて、一八九六年には教授ルドルフ・シタムラーの唯物史觀に關する重要な著述が出た。けれども、反マルクス的十字軍のほんとの初まりは、エドワアド・ベルンシタインが一八九七年に、獨逸マルクス派の機關雜誌『ノイエ・ツアイト』の誌上に、『社會主義の諸問題』といふ標題の下に幾多の論文を發表した時であつて、この論文に於いて、修正説（レウイジョニズム）の最初の企てが發表されたのである。吾々は後章に、新マルクス批評の結果を論ずるに當つて、ベルンシタインをして是等の『諸問題』を論議するに至らしめた原因を説明することに努めたいが、玆には唯だ、ベルンシタインの是等の諸論文、後にはその單行本『社會主義の假定説』（ディー・フォルアウスゼッツンゲン・デス・ゾチアリズムス）が喚起した深刻な感動は、是等の諸問題が本來重要であつたことや、是等の論議を惹き起した原因にも依るものではあるが、それ以外にも、ベルンシタイ

ンの人物如何が、重大な役目を演じたことを一言すれば充分である。

エドワアド・ベルンシタインは多年の間、マルクス說の代表者と認められた人であつたことを記憶しなければならぬ。彼は、ビスマルクの社會黨鎭壓法施行中に於ける獨逸社會民主黨の機關紙、ツーリヒの『ゾチヤル・デモクラート』の編輯者であつた。彼はまた、カール・マルクスの協力者にしてマルクス說を生んだ父の一人なるフレデリック・エンゲルスとも、多年の親交があつた。そこで社會主義者からも非社會主義者からも、均しく科學的社會主義の有力な代表者の一人と目されてゐたのは、無理からぬことであつた。そこでマルクス說に對するベルンシタインの修正の要求は、マルクス批評に空前の衝動を與へたのであつた。有ゆる事柄が修正說に好都合になつてゐた。そして舊るき信仰と在來の敎義とに對して、一般的の點檢が行はれて居つた。マルクス說の舊來の反對者、公然の反對者も内々の反對者も、これに勇氣を得て、再び戰列に加はつた。けれども彼等の多くは、その武器を一變した。彼等は舊るい理論的武器庫に積んであつた舊るい議論、既に陳腐となり無用となつた爲めに、かしこに銹つくまゝに放置してあつた舊るい議論を棄て去つて、一層近代的な修正(レヴイジヨニスト)派の武器を取り上げた。近時のマルクス批評の文書が、何づれも修正派の色彩を帶びてゐるのはその爲めである。

前述の外に、尚は考察すべき著者のうちで、最も重要なものとしてはウェルナア・ゾンバルト、テー・ゲー・マサリック、パウル・バルト、ルドルフ・ウェクステルン、フランッ・オッペンハイマー、ルドヰヒ・ウオルトマン、ツガン・バラノウスキー、及びジアン・ジョーレスがある。今ま一人の修正論者で、その著述には眞價は少ないが、修正説の上に與へた特殊の反映のために吾々の注意を惹くのは、ドクトル・アルフレット・ノーシッヒである。彼は修正説を、一個の學說體系たる尊嚴の地位に引き上げようと試みた唯一の人である。

マルクス批評家は、問題の取り扱ひ方に從つて、ざつと三種に大別することが出來る。第一は哲學者であつて、彼等は主として、マルクスの哲學體系を論じる。第二は經濟學者であつて、彼等はマルクスの經濟學說を吟味する。第三は社會學者であつて、卽ち、主として資本主義的社會組織の發展を支配する法則に關する、マルクスの學說を批評する人々である。尤も此の區分は、決して嚴格に遵奉せられてる譯ではない。早い話がベルンシタインの如く、別々にではあるが、三つの區分を全べて取り扱ふ人もあれば、次には、一部門を以つて主たる題目としながら、その論議が他の部分に亙ることをも辭しない人々もある。

そこでマルクスの學說體系の各部分には、互ひに密接な關係のあること、殊にその『哲學』は、一

彼れの社會學說、經濟學說と呼ばれてゐる部分から引き離し難きものだと云ふことを、本論を通じて、讀者諸君がよく心に留められるように、玆にマルクスの學說體系の簡短な梗概を記るして置く。

『人間は相ひ集まつて生活を營むところから、相互の間に、自分の意志にはよらぬ或る種の必然の關係を結ぶことになる。卽ち産業上の關係であつて、この産業上の關係は、その社會が到達してゐる物質的生産力の發達の段階に照應するものである。そして是等の産業上の關係の總和は、その社會の經濟的構造を形造るものであつて、この經濟的構造こそ、其の上に法律上政治上の上部構造の築かるべき眞の基礎であり、又た之に應じて一定の形を取つた社會的意識を生ずるものである。物質上の生活資料を生産する方法は、社會的、政治的、知識的生活の過程一般を決定する。人間の生活を決定するものは、人間の意識ではなくて、反對に、人間の意識を決定するものは、その社會生活である。

『社會の物質的生産力がその發達の一定段階に達すると、舊來の生産條件——これを法律上の言葉に現はせば、是等の物質的生産力が今日まで其の下に働いてゐたところの、舊來の財産關係——と衝突する。是等の財産關係は、曾ては生産力の發達の形態であつたものが、今は一轉

して生産の桎梏となる。そこで社會革命の時期が開始する。經濟的基礎の變化につれて、宏大な上部構造全體は、徐々に若くは急激に、革命せられて來るのである。』

財產の私有を基礎とする社會にあつては、その發達の如何なる段階に於いても、當時使用せられつゝある生產要具を所有する社會的階級が、その社會を政治的に支配するものである。そして社會の物質的生產力が、舊來の生產條件と衝突するやうになつた時は、卽ち新しい階級がその社會に起つたのであつて、この新らしい階級は、舊來の支配階級、卽ち新しい物質的生產力を所有し、管理してゐる階級の至上權に對して異議を唱へ、茲に兩階級の間に生死の闘爭が起つて來る。この闘爭は、必ず新興階級の勝利に終り、そして新興階級の勝利に續づく社會革命によつて、新しい物質的生產力は解放され、充分に其の力を發揮することが出來る。そして新興階級はこの生產力を支配して、政治上にも至上權を有するものとなる。『或る社會形態は、その裡に發達の餘地を與へられてゐる一切の生產力が、悉く發達しきるまでは決して崩解せぬ。また新らしい、そして一層高級な生產關係は、この生產關係を支持すべき生活の物質的條件が、舊るき社會自體の裳裾のうちに生まれるまでは、決して確立せられない。そこで人類は何時でも、其の力で實行することの出來得る仕事をのみ、自分の仕事とする。なぜならば、精密に吟味したならば、仕事そ

のものも、之が解決に要する物質的條件が既に手近に備はつてゐるか、さもなくば少くとも形成されつゝある場合にのみ、發見せられるものだからである。

『資本主義的生産方法から生じる産業關係は、社會的生産の最後の矛盾した形態である。それは個人的矛盾の意味ではなくて、個人の社會的境遇から生ずる矛盾である。けれども資本主義的社會の裳裾のうちに發達してゐる生産力は、同時にまた、この矛盾の廢止に必要な物質的條件をも創造する。故に資本主義的社會形態は、人類社會史の序言を結ばしめるものである。』

この矛盾の廢止に必要な物質的條件は、資本制度が發達して、その物質的生産力が舊來の生産條件と衝突し、そして舊來の生産條件が生産の障害となり、斯くて社會革命に到達した時に、正さに資本制度そのものゝ裳裾のうちに成熟したのである。

斯ように社會革命に導くところの、資本主義的生産制度の崩解は、資本主義的生産制度に固有內在する矛盾によつて、齎らされるものである。

資本主義的生産形態を支配する法則は、遂には、獨立した財産所有階級としての社會の中層を絕滅し、社會を二つの階級に分割する。卽ち社會の一切の富を所有する極めて僅少な少數者と、何物をも所有せず、飢餓を免れる爲めには自己の身體をすらも所有することの出來ぬ民衆の多數

――即ち勞働階級――との二つの階級に分割する。之と同時に機械の發達は、益々多くの勞働者を失業せしめる。そして生産に使用せられてゐる勞働者の受ける配前、彼等自身が生産したもののうちから彼等の受ける配前は、愈々益々少なくなる。斯くて社會の生産力は抑制せられて、その大部分が遊んでゐなければならぬばかりか、斯ような强制怠惰の狀態におかれて居らぬ部分の生産力すらも、驚くべき浪費と痙攣的の中絶とを伴ひつゝ。僅かに生産を續づけられるに過ぎぬ。そしてとゞの詰りには、次の如き危機に到達する。即ち勞働階級の一大部分が失業の狀態にあること〻、職業に就いてゐる勞働者が勞働の報酬として、自己の生産物の中から受ける配前が少ないこと〻の爲めに、驚くべき莫大な品物が集積せられて居りながら、資本家は之を手放すことが出來ぬ。即ち販路を見出すことが出來ぬ。そして新しい生産の基礎が置かれるまでは、生産は萎ひ、何時までも中止されねばならぬ時が來るのである。

然るに一方には、勞働階級の不滿は募つて來る。勞働階級に對して加へられた不正の感は、積もり積もつて來る。斯くて勞働階級の間には、勞働階級に固有な倫理法則を發達した。彼等は自ら何等の財産をも持たぬから、私有財産に對する神聖の觀念を悉く失つた。多くの財産は會社によつて所有せられてゐて、『蹴らうには體がなく、責めようには魂がない』から、彼等は勢ひ個人

的私有の必要と、個人的所有者の有用なことゝを認めぬようになる。彼等は失ふべき何物をも持たぬので大膽となつた。彼等はまた、家族の爲めに何事をもすることが出來ず、そのうへ家族は、多くは扶養を受ける者ではなくて、獨立した同僚たる勞働者でもあるから、彼等は家族に對する義務を忘れて來る。然るに自己の階級に對する義務の觀念は、決勝戰に到るまでの長い闘ひの間に、斷えず彼等のうちに成長する。

勞働階級は、資本主義的生産と搾取との過程そのものゝ結果として、組織せられて來た。そして自己の力と可能とを理解するほどに敎育され、自己の上に展開し來つた歷史的使命によつて勵まされた。勞働階級はまた、社會の全生産力を充分に利用するように、社會の生産を一層高い水準に引き上げて指導し管理する爲めに必要な一切の要素を、自己の階級のうちに持つてゐる。生産力の機械的發達は、大なる協同的の基礎の上に立つ生産を必要とする。勞働階級は社會の機關と組織を掌握する。斯くて協同主義の自由國が實現し、斯くて人類社會の眞の歷史が初まるのである。

第二章　唯物史觀と階級鬪爭

近頃のマルクス批評の最も興味ある特徵の一つは、批評家の間に、マルクスは果して哲學者であつたか、どうか、又たマルクス說は哲學であるか、どうかといふ大眞面目な討論の行はれて居ることである。そして之に就いては、多くの著名にして博識な批評家の間に、極めてまち〳〵な、そして矛盾した意見が行はれてゐる。そればかりでなく、マルクス自身が此の問題をどう考へてゐたかと云ふ事に就いても、彼等はまち〳〵な意見を述べてゐる。その混亂と云つたら非常なもので、マルクス自身またはエンゲルスに溯らぬ限りは、この混亂から脫し得べくもない。そしてこれが何時でも、反マルクス的文書の中に充滿するマルクス說に就いての矛盾撞着した記述の迷宮から逃がれる爲めの、最善の方法なのである。

マルクス及びエンゲルスの著述を注意して研究すると、彼等は、從來『哲學』と稱せられてゐたものは、ヘーゲルに至つてその極點に達し、終局に到つたものであつて、この時以後、哲學は科學によつて代はられたと云ふ意見を抱いてゐたことが分る。尤もマルクス以前に、ルドヰヒ・

フォイエルバッハは、既に『私の哲學は――無哲學である』と云つてゐる。そしてマルクスとエンゲルスとは、抽象的な哲學に代へるに具體的な科學を以つてして、フォイエルバッハの言葉を實現した。故にエンゲルスは『この思想(唯物史觀)は、丁度自然界の辨證法的解釋(ダイアレクチツク・コンセプシヨン)が、全べての自然哲學を不自然とし、不可能とした如く、歷史の領域に於ける哲學を終局せしめた』と云つてゐる(註一)。マルクス說は、抽象的の哲學ではない。否なその反對に、具體的の科學であり、從つて全べての哲學の嗣子である。

註一 Frederick Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen deutschen Philosophie. Stuttgart, 1895.

マルクスは人類社會に、新しい研究法を用ひた結果として、舊哲學と手を切り、科學を以つて哲學に代へた。けれども人類社會に就いての哲學と科學には、之を一貫した思想の連續があつて、それは恰かも、組織の形態は變じても、人類社會そのものは連續し、その進步の過程の異なるに伴ふて盛衰した『經濟』は種々あるにも拘らず、人類社會の經濟組織には連續があるのと同樣である。マルクス說が全べての哲學の嗣子たる所以は茲にある。

マルクス說は、人類の發達全體の理論的の歸結であり、また結果である。マルクスは彼れの哲

學を組成するところの要素が、彼れを待ちつゝあるのを發見した。即ち宇宙を辨證法的(ダイアレクチツク)に、若くは進化的に思索する方法と、唯物的見解、即ち宇宙の物質條件のみが吾々の知るところのものであり、從つて認識し得られるものであると云ふ見解が、彼れの前に既に存在してゐるのを發見した。そして彼れの哲學は、要するに當時の時代が大いに要求してゐたところの、此の二つの思想の結合であり、適用であつた。

然しながら、『經濟的唯物論(エコノミツク・マテリアリズム)』Economic Materialism.『辨證法的唯物論(ダイアレクチツク・マテリアリズム)』Dialectic Materialism. 或は『唯物史觀(マテリアリスチツク・コンセプシヨン・オヴ・ヒストリー)』Materialistic Conception of History. 等の色々の名稱で知られてゐる此の學說を公平に研究する爲めには、その構成分子たる思想を現はす言葉、即ち唯物的とか乃至は辨證法的とかいふような言葉は、日常の用語では、如何がはしい道德上や心理上の性質と結びついてゐる爲めに、勢ひ是等の名稱にも纒つはつて來る偏見から、先づ吾々は脫却しなければならぬ。一體、辨證法 Dialectics と云ふ言葉は、普通には、狡猾な討論家が、堅白異同の辯を弄する心的詭計――云はば精神上の骨牌の掏り替へによつて論證を作り出だすが如き推論――を聯想させる。また時としては辨證法なる言葉は、『詭辯的(ソフイスチツク)』と同一意味に用ひられてゐる。ところが此のソフィスチック Sophistic といふ言葉がまた、隨分誤用せられる言葉である。然るに唯物論(マテイリアリズム)

Materialism といふ言葉になると、一層甚だしい。俗に唯物論者とは、下劣な、野卑な、利己主義者のことゝ思はれてゐる。世間並みの考へでは、唯物哲學者と云へば、其の考へは卑しい生活上の快樂に繋がれ、常に好運を狙つてゐる者であつて、その思想には神なく、その感情には人道なく、『理想』とか『高尚な道念』などと云ふものは、全く無しに出來上つてゐる人間のように思はれてゐる。

これは云ふ迄もなく虚妄である。哲學上の唯心論、または哲學上の唯物論なるものは、實生活の上で如何なる思想上の動機を主張するとか、乃至は又、實生活の上で抱いてゐる思想上の動機の影響とは、全然無關係のものである。哲學上の唯心論と唯物論との問題は、單に眞實の世界——卽ち完全にして獨立の存在を有し、從つて自己の存在と發展の法則とを其の中に含んでゐる世界——に達するには、吾々の感官を以つて認識する世界以外にまで行かなければならぬか、否かと云ふ問題である。唯心論者、少なくとも徹底した唯心論者は、吾々を圍繞し包括するところの物質世界は、全然、獨立の存在を有しないものであつて、唯だ或る非物質的のもの、卽ちいろ〳〵の觀念のみが獨立の存在を有し、從つて獨自の發展の法則を有して居り、そして物質は觀念の影またはは表現であつて、物質の世界は、單に是等の觀念の發展に隨ふものに過ぎぬと主張する。之に反して唯物論者は、吾々に取つての唯一の實在世界は、吾々の感官を以つて認知し得る物質の世

界であり、更にこの感官の助けによつて得る知識以上には、吾々は何物をも知らぬものである、そして觀念は何等の眞實の獨立的存在をも有せず、また有し得ぬものであつて、單に感官の媒介を通じて認知せられた物質世界の反映に過ぎぬと主張する。

これは唯心論と唯物論に就いての、先入の觀念とは聊か異なつた別個のものである。そこで哲學上の見解では唯物論者である者も、その實生活に於いては、必ずしも『理想主義者』たることを妨げず、又た哲學上では唯物論を取るといふことは、實生活の上で『理想主義者』たることゝは全然沒交渉であるといふ事實を、容易に理解することが出來る。之は唯物論に辨證法(ダイアレクチック)を附け加へても同じことである。卽ち前述の議論は、歷史の領域に移しても同じ事である。なぜならば、『辨證的方法(ダイアレクチック・メソツド)』とは、唯物論を歷史の領域に移すことを意味するものに外ならぬからである。言葉を換へて云へば『辨證的方法』とは、單に次の如きことを意味するに過ぎない。卽ち吾々は此の世界を死んだ不變の物と見ないで、斷えず變化しつゝあるものと見る。この偉大な眞理を始めて發見したギリシヤの大哲學者が云つたように、何物も在るものはない。萬物は化成する。更に精確に云へば、存在とは變化若くは成長の不斷の過程である。若し吾々が物を理解しようとするならば、吾々はその出現と、消滅と、その成長と衰亡とを理解しなければならぬ。

斯ように事物をその運動に於いて思索し、事物の誕生と衰亡とを考察する方法が、一唯物論者――詳く云へば物質上の事實のみが存在し、且つ獨立に發達するものであつて、觀念は單に物質世界の存在と發展とを反映するものに過ぎぬことを知る人――によつて、人間社會の歷史的研究に應用せられた時に、これが卽ちマルクスの學問體系の根底たる、唯物史觀である。言葉を換へて云へば、唯物史觀は、全體としての人間社會の進化と全べての人間の制度とは、唯心論者の主張するように、彼等の棲息する社會とその制度とに關する人間の觀念の上に起つた變化――そして此の變化は、觀念の發展に固有內在する法則によつて生じたものである――の結果ではなくて、その反對に社會の發達――このうちには人類の社會と制度とに關する人間の觀念をも含めて――は、人間を圍繞する物質的狀況の發展の結果であり、そして此の物質的狀況こそ、獨立の存在と發達とを有する唯一のものであつて、此の物質的狀況の變化が、人間社會の諸制度を、之に適合するように變化せしめるものである、そして社會の成員たる人間に關係した一切の問題に就いての觀念――その中には人間相互間の善惡の觀念、神と人との間の善惡の觀念をも含めて――は、人間の生存する物質的狀況の變化に從つて、又この變化の結果として、人間によつて變化せらるものである、と主張するのである。

先にも述べた如く、この哲學の組成要素たる唯物的『見解』も辨證法的『方法』も、いづれもマルクスは、直ちに役に立つものとして出來上つてゐるのを發見した。そこで此の領域に於けるマククスの偉大な功績は、此の二つのものを結合して、その結合物を、明確な學說體系に納めたことである。

然しながら、之は決して哲學(フィロソフィー・サイエンス)といふ學問に對する、マルクスの貢獻の一切でもなければ、また恐らく最も顯著なものでもなかつた。單に哲學上の敎義を減說することは、人類歷史の進路に、未だ曾て何等の說明をも與へてゐなかつた。然るにマルクスは初めて其の天才を揮つて、先人に取つては封印された卷物であつた歷史を、一個の科學とした。この科學は、他の精確な科學ほどには精確でないにしても、尙ほ同じほど有用な科學である。そしてマルクスは抽象的の思辨を捨てゝ、歷史を科學的に取り扱ふことによつて之を成就した。卽ち彼は、事實の進化する法則と、其の相互間の關係とを明らかにする爲めに、歷史そのものを、事實の爲めに吟味した。そして之は、外部からの先入の推斷が混ぢつて來ることを許さないで、吾々は一切の知識と觀念とを、現に存在する『事實』そのものから得るものだと主張する彼れの唯物的『哲學』と、嚴密に一致するものであつた。

斯くて『唯物的の』概念が得られると、次にマルクスの爲すべきことは、歷史の『物質的』要素と

は、果して何であるかを決定することであつた。マルクスの考察は、歴史の第一の動力は、經濟的條件であると云ふ信念に導いた。そこでマルクスは『唯物的(マテリアリスチツク)』と云ふ言葉に代へて、『經濟的(エコノミツク)』と云ふ言葉を用ひる必要を感じた。之がマルクスの歴史觀を完成し、之がマルクスの歴史觀に著しい特徵を與へた。そして此の特徵こそ、多くの人々がマルクスに先だつて發見してゐると主張するにも拘はらず、尙ほ且つこの歴史觀全體を、眞正の『マルクスの』歴史觀たらしめたものである。そして此の特徵こそ、マルクス說に科學的價値を賦與したものであると同時に、マルクス說をして、全べての似非科學的批評の標的たらしめたものである。

この歴史學說の大なる功績は、歴史の進路を眞實に說明することである。そしてマルクス以前に歴史を說明しようとした企てた——テイヌやバックルの如き『唯物論者』をも含めて——まだ眞實に歴史の進路を說明したとは云はれなかつたのである。

マルクスが經濟的要素の優越を主張したのは、獨斷的の偏見や、先入主となつてゐる豫定の說明を、歴史的硏究に持ち込んで來た結果ではない。經濟的要素を、唯一の物質的要素として主張したのは、それが唯一の變化し發展する物質的要素であり、從つて又、マルクスの謂ゆる社會の『上部構造』に變化と發達とを起す唯一の物質的要素だからである。自身で變化しないものは、變

化を起し得ぬことは云ふまでもない。如何なる數學家も、運算の結果に生じた變化を、不變の因子に歸しようとはせぬ。その結果に變化を起すものは、變化するところの因子である。然るに經濟的要素を除いた他の全べての物質的要素を列擧して見ると、何づれも皆な不變であるか、さもなくば殆んど不變に近いものである。けれども是等の要素といへども、變化をし、そして其の變化によつて人類歷史の進路に影響を及ぼす範圍では、マルクスは固より是等の物質的要素の力をも充分に認めてゐる。そこで人間が、極めて粗雜な道具を用ひてゐる爲めに、全然、自然力に隷屬し、そして自然力の些細な變化からも、直接に影響を蒙るような原始未開の社會を研究する場合や、又は大發見の場合のような、從來は一向重要でなかつた或る地理的特徵が、極めて重要なものとなつた場合には、經濟的要素以外の是等の物質的要素は充分に其の力を認められ、其の影響は仔細に考究し確定せられたのである。

そこで言葉を換えて云へば、經濟的要素以外の一切の物質的要素も『算入』せられてはゐるが、唯だ細かに計算して見ると、是等の要素の影響は極めて微細なものであつて、主たる要素、卽ち經濟的要素に對して、補助的の地位を占めるものであることが分る。且つ（そして之が一番肝要である）この影響は、人類の進步につれて愈々益々減退してゐるのである。そこで社會進化の大

體の圖面を描く場合には、暫らく之を計算外に置いても差支へないのである。

そこで唯物史觀論者は、一切の社會的秩序の根底は、第一には生産であり、生産に次いでは生産物の分配であると主張する。卽ち社會の有ゆる歴史的形態に於いて、人間の勞働によつて造られた生産物の分配と、並びに之に伴ふてその社會が階級または身分に分れてゐる社會的の配合とは、その社會に於いて、如何なる物が如何にして生産せられ、そして其の生産物が、如何ように交換されるかと云ふことによつて定まるものであると主張する。故に全べての社會的の變化と政治的の變形との究極の原因は、永遠の眞理とか、正義とか、乃至は之に類した『觀念』の理法に對する人智の增進に求むべきものではなくて、生産及び分配の方法の變化に求むべきものである。――卽ち哲學に求む可きものではなく、その時代の經濟の裡に求む可きものである。それは倫理のうちには求められぬ。なぜならば倫理そのものが變化するものであり、そして人間社會の組織の奥底に横たはるところの、色々な狀況の結果だらかである。『今日までに存した全べての道德說は、究極まで分析すれば、その時代に於ける社會經齊狀態の結果である。現存の社會組織は不合理にして不正であると云ふ考へや、曾ては道理であつた事が無意義となつたり、昨日の慈惠は今日の痛苦となつたといふような考へに、漸次に目醒めて來ることは、生産の方法と交換形式とが、

暗默のうちに變化を受け、その結果として、從來の經濟狀態に合はせて切り篏められてゐた社會の排列が、今では狂つて來たといふ事實を語る一徵候に外ならぬ。そして其れは又た同時に、發見せられた弊害を救治する方法が、生産關係の變化につれて、多かれ少なかれ既に發達してゐることを物語つてゐるのである。』

そこでマルクスが『經濟學批評(ツール・クリテーク)』の有名な序文――その一部分は前章に引用した――のうちに言及した社會の基礎とその上部構造とは、ざつと次の如き設計の上に、公式的に言ひ表はすことが出來る。即ち構造の基礎は、社會の生産力の一定の發達程度である。この生産力の發達程度が、その社會を組成する各個人間に、生産及び分配の社會的過程に就いて一定の關係を作る。そして此の關係は、彼等の間に於ける生産物の分配を決定する。次に今度はこの關係の結果として、この關係を表現した一定の社會形態と一定の社會制度とが生ずる。茲に於いてか此の社會には、その社會形態に適合した心理狀態と、その社會狀態と揃ひの風俗習慣とが行き渡る。そして全べて是等のものは、其の社會の哲學、文學、藝術となつて其の頂點に達する。要するに是等のものは、心理狀態や風俗習慣から生ずる才能、趣味、及び傾向の結果である。

或る社會に行はれてゐる思想は、その社會の上に强大な影響を與へるものである。けれども是

等の思想の淵源は、その社會的環境であつて、この社會的環境は、またその社會の經濟關係の結果である。そして是等の思想は——それが政治上の思想であらうが、道德上の思想であらうが、宗敎上の思想であらうが、乃至は其の他の思想であらうが、その何づれであるとを問はず、全べて或る社會に行はれ、そしてそれが行はれてゐる間はその社會に於ける人々の行爲を左右してゐる思想は——その淵源となつた經濟狀態が變化を受けた場合には、其の勢力を失なひ、漸次に放棄せられるものである。更に經濟上の利害に基づいた階級に分れてゐる今日の社會にあつては、或る時期に行はれてゐる思想は、單に一定の經濟狀態の結果であるばかりでなく、主として、此の經濟狀態によつて優勢的位置を占めてゐる或る社會階級の希望と、要求と、必要とに應じたものである。そこで或る一つの社會には同時に幾組かの思想があり得るし、又た實際にも屢々そうである。そして是等の思想は、互ひに正反對に矛盾してゐる場合もある。そして各々、その思想によつて利害關係を代表せられてゐる階級によつて、支持せられてゐるのである。

尤も普通には、唯だ一組の思想の行はれてゐるのが常であるが、その理由は斯うである。今日の社會、詳しく云へば財產の私有を基礎とする社會に於いては、その社會が生存し、幸福を得てゐる品物の生產に要する機關を所有してゐるか、または其の支配を握る人々の階級が常に存して

ゐる。そして此の階級は、社會の生産手段を支配してゐる爲めに、從つてまた社會の生産及び交換を管理し監督してゐる爲めに、其の利害に適合するように、また其の支配を確保するように、社會の制度と風習とを形造る。この階級は、自己存在の法則を無視せぬ範圍に於いて、絕對的支配權を持つてゐる。詳しく云へば其の支配權は、自己階級を創造した經濟力に從つて、且つそれを助長促進するように、そして是等の經濟力を充分に働かし、その潛在的勢力を充分に伸ばして、其のうちに藏してゐる有りたけの利益を社會に與へしめるように、運用されなければならぬ。

社會の生産を支配してゐる階級の斯ような權力は、それが社會の生産を支配し、從つて社會の生存と安慰との資料を支配してゐると云ふところから、社會の他の成員の上に持つ强制力によるばかりでなく、その說服力にもよるものである。利害の點から云へば、支配階級の利害は、社會の進步と方向を同じくするものであるから、從つて社會一般の利害と一致するものと認められる。

更に一層高尙な『理想主義的』の立場から見ても、此の階級の地位には打ち破り難いものがある。此の階級が力（マイト）によつて獲得したものも、よい加減時日がたつと、時效の法則（語路のよい『傳統』で通つてゐる）によつて權利（ライト）となつた。時效の法則は、何等の權源の證據をも俟たないで、人々の意識の奥底にしみこみ、其の感情と同じ擴がりをもつようになるから、この時效の法則こそ、

權利の最も大きな、且つ最も有力な淵源である。そして社會の物質的食糧と共に精神的食糧をも支配してゐる此の權力階級は、斯くて出來上つた自己階級の權利に對する自然の感情を助長する爲めに、自己の權利の觀念を、人爲的に社會の成員に敎へ込む。そこで全社會には、概ね權力階級の思想が、浸み渡つてゐるのが常である。

然しながら『世界は動く』。人間は自然を支配しようとする鬪爭には、極めて發明的である。人間の發明力（その速度）は色々の條件に支配されるが、自然の搾取（エキスプロイト）に用ひる道具が、絶えず進歩的の變化をする結果として、人間の發明力もまた殆んど不斷に進歩するものである。道具の變化につれて、人間は自然を搾取する方法を替へるし、時としては搾取の舞臺をも替へる。けれども此の變化は、急激には起らしい。改良した新しい道具と、それに伴ふて生ずる新方法とは、ぼつ〳〵と完成され、漸次に實用に供せられるようになるものであるが、新しい搾取の舞臺が一般的となるのは、一層ゆる〳〵である。しかも新しい道具のうちに體現せられた新しい經濟力の進行は、阻止することが出來ぬ。其の進行は、初めの程こそ徐々たるものであつても、前進するに從つて、それは落下する石のように速度と動量とを增し、遲々たる進歩も、遂には其の進路に横はる一切の障碍物を掃蕩する奔流となるのである。

新しい道具が出現した時に、卽ち新しい政治力が社會に生れたのである。この政治力は、新しい道具が社會の經濟に重要となるに從つて成長する。そして人爲的の障害が、新しい道具の普及を阻止してゐる場合には、今度は此の政治力がこの障害を打破して、新道具の本然の發達を助ける。斯くてこの新しい政治力を有する階級、卽ち新しい道具と其れによつて造られた生産物とを所有し支配する階級は、當時の支配階級、卽ち在來の生産機關を所有し支配してゐた當時の支配階級と鬪爭を開始する。そして斯ような社會組織の支配權を獲得しようとする鬪爭は、新しい道具の使用が發達するに伴ふて、日を追ふて烈しくなる。そして新たな經濟的活動の領域に這入つて來る新入者は、其の領域を支配してゐる階級の軍勢の一兵卒となるのである。

この鬪爭は、必然に避くべからざる結末に到達するまでは繼續する。卽ち經濟的には、更に改良を加へた新しい生産の機關が有力となること、政治的には、この新しい生産機關を支配し、運用する階級が優勢になることである。斯うなると、事物の新しい秩序が生じる。そして此の新しい生産方法が、從來のそれと非常に異つてゐる場合には、こゝに新社會が生れて來る。從つて新しい政治制度、新しい宗教上の信仰、新しい道德觀念、新しい藝術上の趣味、新しい哲學體系が生れて來る。斯くて歴史は其の道を走る。昨日の新しきものは、明日の舊きものとなる。すべて

の秩序は、順繰りに新らしくてまた舊るい。初めには自己の存在と承認との爲めに闘ひ、次いでは自己の存在の爲めに、又た自己の存在を危くする新要素の承認を拒んで、自己の權力的地位を維持せんが爲めに闘ふ。斯くて今日の進步的分子は、明日の反動的分子となる。

斯ような二つの經濟的勢力の間と、そして此の經濟的勢力を代表する社會の二つの階級との間の、社會的生存の闘爭には、普通に、力と說服とが兩つながら用ひられる。そして兩者の用ひられる狀態と割合とは、地方的の影響によつて決せられるものである。前にも述べたように、定說となつてゐる在來の見解は、それが利害關係(階級的利害關係)から生れたものにせよ、乃至は傳統として受け容れられたものにせよ、新しい經濟的勢力が充分有力となつて、彼等自身の意見と、彼等自身の『理想(アイデオロギー)』とを組み立てゝ、之を人々の心の裡に敎へ込むようになるまでは、此の在來の定說は、社會全體の上に有力な影響を與へるものである。新しい思想は除々に形成せられる。そして此の新しい思想が人心を歸依せしめるのは、尙ほ一層除々である。然しながら一朝、時が來て、社會が經濟的に充分に革命せられて來ると、此の思想そのものも亦た一個の革命の要素となつて、舊狀態の破壞を助ける。そして是等の思想を生み出した經濟的變化を利益とする階級が、是等の思想によつて熱せられ、經濟的利益は忘れてしまひ、ひたすらに此の思想のみによつて動

かされてゐる場合が屢々ある。そればかりではない。中立の階級、甚しきは利害の相反する人々でさへも、是等の新しい思想に驅られて、革新軍に加はることがある。これは新たな思想は、常に社會全體の進步と並馳するところの經濟的變化の反映であるからである。

そこで新たなる思想は、常に新たなる經濟狀態から、時としては直接に生じ、時としては間接に生れたものである。けれども斯ようにして一度び生じた思想は、常に社會の進步の爲めに行はれる階級鬪爭の上に、重要な働らきをするものである。なぜならば全べての新たな階級は、同時に社會の爲めに、また自分自身の爲めに鬪ふものだからである。そして新たな思想こそ、階級鬪爭に從事する社會的勢力に、その特質を賦與するものである」

第三章　唯物史觀と其の批評家

唯物史觀に對して、マルクス批評家の提出してゐる第一の反對論は、今ま茲に考察しようとする『哲學的』反對說である。吾々が先づ第一にこの反對說を考察しようとするのは、その觸れ込みの大きいのと、その老年な爲めとである。卽ちこの反對說は、實際に於いては、既に一八四五年の昔に、マルクスが早くも論駁の必要を見た舊唯心哲學の新版に過ぎないものである。その純粹な唯心論的の形に於いては、マルクスは其の著『神聖なる家族』（ディー・ハイリーゲ・ファミリィ）の中に、彼れ一流の手際を以つて勘定を濟ましてゐる。之によつて差引勘定は濟み、唯心論に就いては、最早や聞くところが無かつた。ところが今日となつて、それは科學的認識論と心理學といふ表裝をつけて、極まり惡るさうに再現した。けれども服裝の何たるに拘らず、それは根本に於いて同一であつて、異なるところは、唯だその純粹性を失つた間に、論理を失つてゐるだけのことである。例へばヘーゲルによつて代表せられる純粹唯心論は、論理的には構造の完全な建築物である。それは誤つた基礎の上に立つてはゐるが、その前提そへ承認されゝば、論理的構造は堅固である。ところが近世『哲學

はそう行かぬ。それは完成された唯心論的構造の論理を持たない唯心論である。更に宜しくないことは、それは反動的である。反動的であることは、必ずしも唯心論の屬性ではない。ヘーゲルの唯心論的體系は、必然にマルクスの唯物論によつて繼承せらるべきものである。そこで此の哲學發展の上の理論的結果を回避しようとするところから、彼等は『昔に歸へれ』を以つて標語とする。昔に歸れば歸るほど良い……そこで是等の哲學者中の一明星たるワイゼングリューンは、バアクレーに懐しさうな一瞥を與へてゐるが、このバアクレーたるや、成るほど唯心論者といふ點では、恐らくヘーゲル其人ほどの唯心論者ではあつたらうが、ヘーゲルをして眞に一大哲學者たらしめ、その學説體系をして、哲學發展の一大段階たらしめた歴史的の精神に至つては、彼れには全く缺けてゐた。

ワイゼングリューンは健全にして光輝ある思想家ではあつたが、惜しいかな、苟めにも歴史的意義のある全てのものに對する嫌厭は、彼をして、歴史を形成する眞個の力は、想像若くは幻想（ファンタジー）であると揚言せしめた。彼れ自身の言葉を用ひれば、『幻想は一切の歴史の造物主である……歴史を造る者は發達した智力ではなくて、基本的の幻想である。』（註一）之はこれ、大山師ノーシッヒの大發見とも肩を並べ得べき發見である。ノーシッヒは一大科學的マルクス批評家といふ思ひ入れ宜

しくあつた後、似非科學の有らん限りの華やかさを以て、さて現代の社會に於ける一切の缺陥に對する救治策は、かの猶太人の風習、五十年祭なる事を發見したと、さも物々しく揚言した人である。

註一 パウル・ワイゼングリューン『マルクス主義と社會問題の本質』ライプチヒ一九〇〇。(Paul Weisengrüen, Der Marxismus und das Wesen der sozialen Frage. Leipzig, 1900.)

然しながら吾々はこの所には、哲學的反對說とその數多い種類とを、詳細に亙つて論ずることは出來ぬ。斯ような議論は、唯だドイツの敎授連や、浩瀚な書物を讀んでゐられる其の他の人々とに見て貰ふのが著者の本懷であつて、如何なる場合にも、それは決して、形而上學的空論の贅言に耳を傾ける時間を持たぬ民衆を目的としたものではない。そこで玆には唯だ、是等の議論の要領は、畢竟、次の如きことに歸着すると云ふに止どめておく。卽ち、物質的條件が思想に變化することを、哲學的に示す方法が無い、從つて思想は、經濟狀態の結果ではあり得ない、それ故に思想の存在と、歷史に及ぼすその影響とを否認しない以上は、經濟狀態は、歷史の主要動力である筈がない、といふことに歸着するのである。

全べて是等に對する答は——こゝでも冗長にして晦澁な哲學的議論は拔きにして——エンゲル

スの云つたように、要するにプデングの證據はプディングを食ふことにある。若し吾々が、思想の發展は經濟狀態の發展に隨伴したと云ふことを、歴史的資料によつて證明し得るならば、この變形が如何にして行はれたかといふ、『哲學的』問題に煩はされるの必要は無いと云ふことである。そこで御自身の足元に氣を附けて、如何にして此の變形が行はれたかを明示するか、それとも率直に自分の無能を告白するのが『哲學』の仕事である。唯だ之は、明かにそれ等の哲學者自身の葬式を意味してゐる。

博學な哲學者諸君、特にマサリック教授その人は（註二）、斯ような高尙な問題に、プディングの如き下品な『物體』を引つ張り出すことには、猛烈に反對する。けれども高尙は諸君の事であつて、幻想の國に翺翔することをせぬ吾々は、野卑なる『物質的』事實に執着することを以つて滿足する。そこで吾々はエンゲルスと共に、唯物史觀の證據は、歴史そのもの丶裡に求ひべきであると主張する。

註二 テー・ゲー・マサリック『マルクス主義の哲學的、社會學的基礎』、ウヰンナ一八九九年。(T. G. Masaryk, Die philosophischen und sociologischen Grundlagen des Marxismus. Wien, 1899)

けれども實際の歴史に就いて見ると、是等の哲學者諸君といへども、事實は——少くとも事實

の多數は、たまく以つて『非哲學的』な唯物史觀と吻合することを承認しなければならぬ。そこでワイゼングリューン自身も斯う云つてゐる。

『或る一定の期間內に於ける、或る一定の歷史的關係に就いては、この歷史的學說(唯物史觀)は、比較的に正鵠な、そして實際的な說明の原則(エルクレエルングスプリンチプ)である。一例を擧げれば、吾々は此の學說の助を借りて、歷史の暗黑のうちから、フランス革命を推し進めた隱れたる經濟的勢力を發見することが出來る。吾々は亦た、ローマ帝國の衰亡時に就いても、此の學說の助によつて、從來よりも遙かに明瞭的確な光明が與へられることは、私の確信するところである。又たドイツ中世紀の多くの形勢も、吾々は適度に經濟上の動機に歸して理解することが出來る。更にドイツのブルジョア階級の無力、殊に一八四八年に於けるドイツのブルジョア階級の無力は、純然たる經濟上の原因によつて、一部分を說明することが出來る。』

讀者も見らるゝ通り、此のマルクス說の大反對者たるワイゼングリューンは、其の著書の他の部分に於いては、マルクス說は一から十まで、悉皆投うり捨てねばならぬと主張して居るにも拘らず、唯物史觀に對してだけは、極めて重大な讓步を肯んじようとする。實際彼は、無頓着にも、一文藝復興(ルネイサンス)を除くの外、基督紀元の初まりこの方のヨーロツパの全歷史(ローマ帝國の崩解、ドイツ

の中世紀、フランス革命、ドイツ革命)を唯物史觀に讓歩する。但し文藝復興だけは、彼は特別に物質的條件の影響から除外して、察するところ『高尙』な影響の爲めに取つて置きにするらしい。そこで彼は、或る歷史上の關係と或る時期とだけは、唯物史觀によつて取扱ふことが出來るが、或るものは然らずと云ふ、槪括的の結論を抽き出した。苟めにも哲學者たるものが、純然たる哲學上の問題に就いて、斯ような中途半端な結論に到達するとは、如何にも奇妙不可思議であるが、尙ほ一層奇妙不可思議なことは、この同一の哲學者兼批評家が、唯物史觀の適用の出來、若くは出來ない地方と時代との硏究にその結論を求めないで、くるりと向き直つて、吾々の知り得る限りでは、其の處には何等の歷史的法則も無い、そして歷史を科學的に書くことも、科學的に取り扱ふことも不可能である、約言すれば歷史科學は存在しないと揚言したことである。この虛無主義こそ、先きにも云つた通り、反マルクス主義者が、少くとも科學的であるといふ見榮を保たうとするならば、唯一にして最後の方法である。そしてこの虛無主義は、唯だに歷史哲學の圈內ばかりでなく、後章に見る如く、經濟學をも引くるめて、廣く社會學の到る所に遭遇するものであるから、極めて重要な意味がある。

然しながら、エンゲルスの指摘した唯一の決定的の證據、即ち歷史の證據に從つて其の批評を

進めぬ者は、マルクス批評家中、獨り虚無主義者のみではない。彼等は恣いまゝに概括を試みる。例へば、マルクスは物質的要素に『不當の』『優越』を認め、却つて考慮に入れねばならぬ要素を無視すると云つた風の批評である。斯ような批評は曖昧であり不確であり、且つ恐らくは各人が、各々自分の想像によつて、どちらの要素が『相當』に認められ、どちらの要素が『相當』に認められなかつたかを、めいめい勝手に決定する『主觀的』の方法以外には、如何なる方法によつても、絕對に證明し得ないことであるから、全然、無意義な言ひ表はしである。

マルクス批評家側ではつきりとした事を云はぬのは、なにも簡單を欲するが爲めではない。是等の紳士諸君は、一體に頗る快辯である。この場合諸君が默つてゐるのは、用心の爲めである。諸君がたまたま何か、はつきりとした事を云つた場合には、何時でも其れは、歷史的事實が之に反してゐるか、さもなくば、マルクスが會て云ひもせぬことを、云つたかのように批評してゐるものだと云ふことを、容易に明示することが出來る。マルクス批評家の多くは、『言葉と觀念との混同』とも名づくべき、一種奇妙な病氣に罹つてゐるらしい。そして彼等がマルクスにせよ其の學徒にせよ、言ひもせず亦た云ふ筈もない色々の事を、さも言つたかの如く見做すのは、この病氣のさすわざである。マルクスと其の學徒とが言つたか言はぬかは、彼等の著述を見れば明々白

々であつて、是等の著述は、批評家諸君もよく知つてゐる筈である。例せばバルト教授(註三)ワイゼングリューンなども此の筆法で、生產機關に於ける技術的發達の上の變化のみでは、全べての歷史的事實は說明することが出來ぬといふことを指摘して、之を以つて唯物史觀に對する、最も有力な難點としてゐるのである。技術上の變化のみで、一切の歷史的事實は說明出來ぬ。此の點では、慥に彼等は正しい。然しながら――そしてそこに瑕瑾がある――マルクス主義者は未だ曾つて、そんな事を主張したことはない。マルクス主義者が斯くの如きことを主張したといふ臆斷は、彼等の常に用ゐる『經濟的條件』と云ふ言葉と、『技術上の發達』といふ言葉とを、批評家諸君が混同した爲めであることは明白である。斯ような混同は、是等の紳士諸君の有せられる辨別の能力の信用を增す譯のものではなく、斯くも鋭敏にして賢明な思想家としては、寧ろ驚く可きことなのである。

註三　パウル、バルト『社會學としての歷史哲學』ライプチヒ(一八九七年)。Paul Barth, Die Philosophie der Geschichte als sociologie. Leipzig, 1897)

こんな單純な事柄に、長々しい說明が必要なことは、如何にも不思議千萬に思はれる。けれども全べてのマルクス批評家は、餘程ひどく前述の病氣に冒されてゐるものと見え、最も明白な差

異と區別すらも、側からの助けを借らずに、無論彼等に判別し得られるものと見做すのは、些さか危險なことである。そこで念の爲めに何度でも云つておくが、生產機關の技術的發達の上の變化は、普通には民衆の物質的境遇の變化を伴ふものではあるが、さりとて必然に之と相ひ伴ふものではなく、この二つのものは各々別個のものである。また生產及び分配の機關に於ける技術上の發達は、民衆の物質的境遇の變化する主要原因ではあるが、必ずしも常にそうではなく、また必然にそうなるものでもない。此の外にも民衆の物質的境遇に影響する原因があるし、また生產及び分配の技術的方面の變化の中には、民衆の物質的境遇に何等の影響をも與へぬものもある。そしてマルクス主義者の主張するのは、歷史の主要原動力は『物質的條件』の變化であつて、此の變化の原因の何たるかは問はないのである。生產技術上の發達は、唯だ歷史の進路に、間接の影響を與へるに過ぎぬ。且つそれは、民衆が生活し勞作する物質的條件に、變化を起す場合にのみ、歷史の進路に影響を與へるものである。

これと同一の病氣——言葉と觀念との混同——は、唯物史觀に對する、今ま一つの大なる反對說の原因となつてゐる。この反對說は、『倫理的』傾向をもつた此批評家の多くによつて、就中、有名な英國の社會主義者イー・ベルフオート・バックスによつて、非常な意氣込みで提出されてゐ

る。バックスの非難は、畢竟、斯ういふことになる。人間は常に、利己心から行動するものではない。彼等は理想上の動機に驅られることも屢々であつて、斯かる場合には、自分の利益に全然相ひ反して行動する。そこで『物質上の利害』を以つて、歴史の主要動力と見做すところに、唯物史觀の致命的誤謬がある（註四）。

註四　ベルフォート・バックス『唯物的歴史觀』（一八九六年『ディー・ツアイト』所載）、及び『新マルクス派の歴史觀と綜合歴史觀』『唯物的歴史觀の界限』（一八九七年『ノイエ・ツアイト』所載）。（E. Belfort Bax, Die Materialistische Geschichtsauffassung, in Die Zeit (1896). Synthetische contra Neumarxistische Geschichtsauffassung.――Die Grenzen der Materialistischen Geschichtsauffassung, in Neue Zeit. (1897)

この反對論に對しては、前章に、唯物史觀は個人々々の理想主義の問題とは、何等の關係の無いことを指摘しておいたので、既に其の一半は答へられてゐる。唯物史觀は、個人をして行動を取らしめる動機を説明した學說ではなくて、民衆の行動――その總和が歴史と名づけるものを形成するが如き行動――を齎らす原動力、卽ち個人の行動の『原因の原因』を說明する、歴史上の理論である。成るほど人間は、一つの理想の爲めには、自分自身の利益に反しても行動する。否

なその生命すらも犧牲とする。けれども尙ほ且つ彼れの行動は、彼れの屬する階級または國體の、若くは斯ような理想を造り出した階級または國體の、物質上の利害の結果であるかも知れぬ。例へば日本の支配階級は、産業の膨脹のために新市場を必要とする。然るにロシアはロシアで同じように、その支配階級が何等かの理由で、その同じ新市場を必要とする。そこで日本とロシアとは、是等の新市場の支配を爭ふて開戰する。その結果、日露の兩國內に、非常に愛國熱が高まつて來る。そして幾千幾萬の人民は『祖國の萬歲』といふ高尙な理想のために、喜んでその生命を犧牲にする。是等の幾千萬の人間のうちで、戰爭の結果に直接『利害關係』を有する者は、極めて少數である。しかも此の少數の者すらも、若し日露戰爭が、單に商業上の提案として彼等の前に提出せられたのであつたなら、彼等はこの『利害』の爲めに、恐らくは決して生命を棄てなかつたであらう。この戰爭で、祖國の名譽の爲めに進んでその生命を犧牲にする者の多數は、戰爭に何等の『利害關係』をも有せぬ人々であらう。否な彼等は戰爭によつて、却つて損害を蒙る人々であるかも知れぬ。けれども彼等は、自己の階級の利害、若くば支配階級――その道德上智力上の後見の下に彼等の階級が立つてゐる――の利害から生れ出た高尙な理想の爲めに、彼等の生命を犧牲にする。それ故に、個々の戰爭參加者の行動は、理想上の動機の結果である。けれども

この歷史的事件——戰爭——そのものは物質的利害の結果であり、そしてこの物質的利害はまた、經濟的條件の結果である。

この反對論は個人の動機と歷史の動力とを混同してゐること以外にも、尙ほ『條件』と『利害』とを混同して居る。マルクス主義者は、未だ曾て物質上の『利害』が、歷史の進路を支配すると主張したことはない。彼等はその學說を正式に述べるには、常に『物質的條件』と云ふ言ひ表し方を用ひる。そして物質的條件は、物質的利害とは全く異なつたものである。物質的條件は通例、物質上の『利害』を生じ、この物質上の利害が歷史の進路を形造るものではあるが、必ずしも常にそうではなく、また必然にそうでもない。時としては物質的條件は、全然、日常普通の意味での『利害』の結果ではなくて、單に物質的條件そのものゝ結果に過ぎない歷史現像を惹き起すことがある。カール・カウツキーはベルフォート・バックスとの論戰中に、次の如き例を引いて居る。彼は言ふ——初代基督敎徒が、一切の現世の利害を見棄てること、卽ち死を希ふことも、當時のローマ帝國の物質的條件によつて、極めてよく說明されよう。けれども死を希ふことを、何等かの物質的利害に歸するのは云ふまでもなく、法外のことである。

若し博學なマルクス批評家らが、唯だマルクスと其の學徒が用ひ且つ言ひ表はした言葉と觀念

とに代へて、他の言葉と觀念とを代用することをさへ注意して抑制したならば、彼等の批評の多くは、自づから倒れたらう。そして其の批評にも、容易に解答を得たであらう。例へばマルクスの著述を精讀し、マルクスの用ひた言葉を明かに理解したならば、經濟上の要素が歴史の上に重要な役目を演ずると云ふことは認めるが、マルクスが經濟的要素の爲めに要求するところは『過大』であつて、彼は其の他の要素を『計算に入れ』て居らぬと云ふような反對論は、悉く一掃されるのである。

斯ように批評家の多くは、人間の性質、人種、地理などを『計算に入れ』なかつたといふ、マルクスの失敗を云々する。然しながら注意して前二章を讀んだ讀者は、是等のものは、全べて『計算に入れ』てあることを了解したであらう。そして其れにも拘らずマルクス主義者が、尙ほ且つ經濟的要素を以つて、歴史的進歩の決定要素であると主張するのは、この要素こそ、歴史の運動、或る狀態より或る狀態への人類の進歩を說明する眞の要素であつて、其の他の全べての要素は比較的に停止的であり、從つて其れは、恐らく人類の或る狀態を說明することは出來ても、其の進歩を說明することが出來ぬからである。

マルクスをして、經濟的要素こそ歴史を動かすところの、眞の物質的要素であると主張する

に至らしめたものは、他の要素を『計算に入れ』損こねた失敗の結果でなかつたと云ふことは、マルクスの著述をざつと一讀しただけでも分る。マルクスは資本論の中に斯う云つてゐる――『社會的生産の條件が、大に發達してゐるか少しく發達してゐるかを別としては、勞働の生産力は、自然の條件に懸るものである。從つて勞働の生産力は、全べて之を人種その他の如き、人間そのもゝの天性と、その自然の環境とに還元し得るものである。外界の自然的條件は、經濟的には、二大別に分つことが出來る。卽ち土地の肥沃や、魚類の蕃殖する水のような、生存の手段としての天然の富と、利用に堪える爆布、航行の出來る河川、森林、金屬石炭などのような、生産の手段としての天然の富である。原始社會にあつては、第一種の天然の富が何より重要であるが、一層高い文化の水準では、最も重要なのは第二種のものである。』

これを讀んだ上で、尙ほ『技術上の發達』こそ、マルクス主義者の認める唯一の歷史的要素であると云ふのは、如何にも理不盡であるが、そこはマルクス批評家は、一種特別の人種である。彼等はどんな事でも爲し得ぬこと、少くとも口で言ひ得ぬ事はない。マルクス及び其の學徒が、唯だに思想の影響を認めたばかりでなく、更に之を强調したこと、並びに資本制度から社會主義への推移に關する彼等の目論見では、思想が極めて顯著な、そして重大な役目を演ずることは、―

前二章に述べたところによつて明白であらう。それにも拘らず批評家の多くは、マルクス主義者が思想の影響を認めぬと云ふ、古る臭いたわ言を並べてゐる。それぱかりかマルクスの言葉を引用して、マルクスの考へは、彼等の云ふところとは全く違つてゐるといふ事實を突き付けられても、彼等は恬として恥づるところがない。彼等は『現行犯で』捉まつても、落ち着き拂つて、マルクスは矛盾してゐると揚言する。然り『資本論』のマルクス、その他の有名な著書のマルクスは、彼等が讀者へのお慰さみに拵らへたマルクスとは矛盾してゐる。近年この『マルクスによつてマルクスを論駁する』商賣は、全く一個の特殊産業に發達した。そしてこの特殊の産業は、若し諸國民の氣の向いてゐる限りは、彼等の快樂に多大の貢獻をした筈であつた。ところが事實は、それ等の著述を讀む『諸國民』は、面白がるどころか、この問題によつて、餘りに多く悩まされてゐる。然しこの問題は、本書の讀者諸君には面白からうから、吾々は後章に於いて、是等の『矛盾』を考察して見よう。たゞこの御馳走は、いよ〳〵マルクス説を全體として考察する時期の來るまで、讀者諸君の忍耐のお禮として取つて置かねばならぬ。またその方が、一層よく味ひが分るだらう。そこで茲には唯だ、一例として其の一つを擧げるに止どめておく――

ロシアの批評家ルドキヒ・スロニムスキーは、次の如き矛盾を發見した。彼は云ふ――マルクス

は、國家の政治上並びに立法上の活動の唯一の動機は、經濟的並びに階級的の利害であるといふ學說を提出した。それにも拘らず、彼は若干の工場監督官の、賞讃すべき行動について吾々に語つてゐるが、就中、レオナアド・ホルナーに就いては、彼が勞働階級の利益を擁護したことは、感謝に値ひすると云つてゐる！（註五）

更にスロニムスキーは斯う宣告する――『マルクスの研究方法の、科學的性質を信ずるその賞讃者と追隨者とが、如何に强辯しようとも、事實は斯うである。マルクスは唯だ一個の空想（ユトピア）を創造したに過ぎぬ。そしてそのユトピアたるや、その性質は俗惡であつて、唯だ凡俗勞働者の狹隘な眼界と、自己の勞働に對して拂はれる賃銀の額を以つて、この上もなき祝福と心得る者共の想像力とに、相應（ふさは）しいものである』。ところが或る界隈では、マルクスは尙ほ大重要視にせられてゐて、民衆は一般に、スロニムスキーの判決に服しないのは、そもそも驚くべきことでないか。（註六）

註五、ルドヰヒ・スロニムスキー『カール・マルクスの謬れる國民經濟學說』ベルリン、一八九七年。（Ludwig Slonimski, Karl Marx Nationalökonomische Irrlehren. Berlin, (1897)

マルクス說は、その創設者の手によつて『改變』せらたとは、修正派の文書中に喧傳せられる所であるが、この『改變』問題も亦た、後の問題に讓りたい。但し是等の假想的の『改變』なる

ものも、實は彼等がマルクス説の假想的矛盾説を尤もらしく見せようとする企てに過ぎないものであつて、假想的矛盾と同列に値ひするものである。故に茲では唯だ、言葉と觀念の混同に基づく、反對論のみに限つておく。尤も繰り返して云つておきたいことは、例の病氣はマルクス批評家間に普ねく流行し、しかもその害の廣く及んでゐることは、殘らず是等を分析するどころか、一々數へ盡すことすらも絶對に不可能なほどである。そこで據ろなく、唯だ最も光輝ある若干の實例を考察するに止どめよう。また若干の著者は、よし外かに取り柄はないにせよ、少くともその著書の厚みによつて、マルクス批評家名薄の上に、名譽の地位を贏ち得た者もある。是等の人々に就いては、機會があつたら後に論じるが、教授マサリックの如きは卽ち其の一人であつて、此の人には後に敬意を表する積りである。茲には唯だ前掲の混同家に、吾がコロンビア大學の教授、米國政治社會科學院總長其他色々のイー・アール・エー・セリグマンを加へたい。彼れは米國の新刊紹介記者が『好個の讀みもの』と云つた『歴史の經濟的説明』と題する小著を書いた人である。但しセリグマン教授は、一個の米國人であるから、公平を信條とする人であり、マルクスに對しても『著しく公平』であり、寧ろ寛大であることを認めて置かねばならぬ。それと同時に、そして恐らくはまた其れ故に、彼は頗る皮相的であつた。また外聞の惡いほど混亂したゐる。この紳

士に就いては、將來、彼れの取扱つた歴史上の『一元論』問題を論ずるに當つて、再說しよう。尤も吾々はこの問題を論議することは、本論の當然の範圍に屬することゝは思はない。と云ふのは『一元論』の問題は、獨り唯物史觀ばかりに影響を與へる問題ではないからである。それは唯心的歴史觀にも、丁度、唯物史觀にと同樣に影響する。言ひ換へれば、それは哲學全般に亙つて、影響を及ぼす問題である。そこで一元論は唯物史觀にも影響は與へるが、さりとて專らマルクス說――吾々の刻下の論題――に向けられた反對論ではない。固より是等の諸問題は、互ひに相ひ倚り相支えてゐるものである。そして大方のマルクス批評家のやつてゐる、混亂した取扱ひ振りの場合に於いて、殊に然りである。是等の批評家は、其の著作のうちに、有ゆる種類、有ゆる毛色の反對論をごつた返へしたハンガリ！風の雜炊、乃至はアメリカ風の薩摩汁を召上がるのが常である。そこで今ま玆には、生粹の吾が米國マルクス批評家のお好みをお目に掛ける。吾々は製造元の包裝のまゝで、この調製品を差し上げ、讀者諸君の解剖分析に托したい。彼は斯う云ふのである――

『一切人間の進步は、根抵に於いては、心的の進步である。一切の變化は、人間の心を通じて行はれなければならぬ。斯ように一切の人類の進化には、疑ふべくもなき心理的基礎がある。

然しながら、尙ほ此の問題が殘つてゐる——何が人類の思想を決定するか……この主張（一切の社會學は、專ら經濟學の上に基礎を置かなければならぬ、そして一切の社會生活は、單に經濟生活の反映に過ぎぬと云ふ主張）は、經濟學は唯だ一種の社會關係を取り扱ふものである、然るに社會には、色々な社會的慾求の種類があるように、多くの種類の社會關係があると云ふ、分り切つた理由によつて、贊同することが出來ぬ。吾々は唯だに經濟上の慾求を持つばかりでなく、同時にまた道德上、宗教上、法律上、政治上、其の他多くの種類の集合的慾求を持つてゐる。また吾々は、單に集合的の慾求を持つてゐるのみならず、生理的、工藝的、審美的、科學的、哲學的慾求などの如き、個人的の慾求を持つてゐる。經濟學者によつて專用せられてゐる『效用（ユーチリテー）』なる言葉は、決して經濟學者に限つたものではない。物は唯だに經濟上の效用を持ち得るばかりでなく、生理上、審美上、學問上、工藝上、道德上、宗教上、法律上、政治上、乃至は哲學上の效用の現はれであり、そして經濟學の類目を爲すところの價値なるものは、更に遙かに大きな分類中の一區分に過ぎない。なぜならば一切の世界は、物と思想とを、その審美上、學問上、工藝上、宗教上、法律上、政治上、若くは哲學上の價値に從つて、少しも其の經濟上の價値には顧慮しないで、絕えず評價してゐるからである。效用と價値とが社會的の性

質を有する限りは――換言すれば、效用と價値とが、人と人との間の關係に懸かる限りは――この二つのものは社會學の主題となるのである。經濟學は唯だ一種類の社會的效用、または價値を取り扱ふものであるから、有ゆる種類の社會的效用または價値を說明することは出來ぬ。人生といふ繩は、多くの複雜な股から成り立つてゐる。

『この方面のことで、苟も個人に就いて眞實でないことは、個人の集合體に取つても眞實であり得ない。吾々は『經濟人(エコノミツク・マン)』なる用語のうちに潛む誤謬を說明することを以つて急務とした時代を過ぎ去つた。實際、經濟生活といふものも、經濟的動機――全べての人間を通じて、最小努力の出費を以つてその慾求を滿足せしめようとする動機――と云ふものもあるには相違ない。けれども一個人は、經濟的動機以外の動機によつても衝動せられて居ること、並びに經濟的動機そのものも、如何なる場合にも同樣に强烈であり、また同樣に他の影響を交えて居らぬものでもないと云ふことは、今更ら指摘する必要はない。苟も人間に影響を與へる全べての動機を充分に分析することは、人間の經濟生活の場合に於いてすらも、社會心理學者の能力を判定する試金石である。恰も『神學人』の存しないやうに、『經濟人』も存しない。商人が家族の綠を持つように、僧侶も食慾を持つ……

『そこで或る意味では、歴史の說明方法は、人間の活動と欲求との類別の多いが如く多いのである。卽ち經濟的說明があるばかりでなく、歴史の倫理的、審美的、政治的、法律的、言語學的、宗教的、科學的說明がある。學者は各々、自己の特殊な立場から、正當に過去の出來事を考察することが出來るのである。』(註七)

註七 エドヰン・セリグマン『歴史の經濟的說明』(一九〇三年)。(Edwin R. A. Seligman, Economic Interpretion of History 1903)。

誰だつて之れ以上に大きな眞理、半眞理、無意味、乃至は分り切つた事の混ぜつ返しの中を通行した人が曾てあるだらうか。『人生の股は複雜多樣』であらうとあるまいと、此の一事は確かである——人間の一生は、この囈言の闡明を企てるには、餘りに短か過ぎる。

若し一切の變化(何の變化?、環境のか?、それとも環境より制度と思想への變化か?)は人間の心を通ほして行はれねばならぬが、さりとて人間の心に始まるものでないとしたならば、何故に一切の人間の進步が、根柢に於いて心的の進步なのであるか。人間進步の根柢に於いて變化するもの——そして其の變化が人間の心を通ほして行はれる——は物ではないか。そして心的の進步——人間の心を通はして行はれる是等の變化の結果——は、唯だ人間進步の頂點に過ぎぬ。

人間の心を通ほして行はれるこの變化を指して、一切の社會的進步の基礎なりと主張したマルクスは、正しくはないのであらうか。

この博學な教授が『社會的要求』と云ひ、『集合的慾求』と云ふのは、何を指すのであらうか。そして此の二つの言葉は、互ひに取替へられるものであらうか。更に何故に、彼れは社會的若しくは集合的慾求から、個人的慾求へ辷つて往つたであらうか。彼れの言ひ分は、唯物史觀は個人的の慾求を說明、若くは『計算に入れ』ないから、不正確だと云ふのであらう。個人的慾求としての『工藝上』の慾求とは何の事だらうか。彼れは肉體上並びに工業上の『慾求』(その意味の如何を問はず)は、物質的の慾求でないと云ふ積りだらうか。工藝上の關係は、徹頭徹尾、社會的、經濟的の關係ではあるまいか。或るマルクスマ批評家ら、就中、彼れの同僚たる卓絕せるバルト教授は、技術上の發展のみでは歷史が說明出來ぬと云ふ理由で、唯物史觀に反對してゐることを、この博學な教授は知らぬのであらうか。そこでどちらが正しいか。バルト教授だらうか。バルト教授に從へば『技術上の發展』は、マルクスの說明の一切である。さもなくば、『技術上の慾求』を包括しないと云ふ理由でマルクスの說明に反對する、セリグマン教授が正しいのであらうか。この紳士は『科學的』慾求、『哲學的』慾求、並びに『法律的』慾求に就いて、親切に說明の勞を惠

むであらうか。法律的の關係とは、一體どういふ意味であらうか。それは成文の法典に現はれてゐるやうな、社會的關係を意味するのであらうか。果して然らば、是等の法律は殆んど全く、人民の財産關係を規定するものであつて、たかゞ僅少の例外が『道德』を取り扱つてゐることを、彼は知らないであらうか。そして財産關係は、慥かに物質的、經濟的の關係である。そしてそれ故に、一切の法律上の關係は、必ずや經濟的關係のうちに包含せられるものであつて、道德上の關係は、實にその表現であることを、彼は知らないのであらうか。

更にまた、セリグマン教授はどういふ積りで、一言の斷りも說明もなく、出し拔けに『經濟學』を以つて歷史の經濟的說明に代へ、唯物史觀がさながら、經濟學といふ特殊な科學による歷史の說明でゞもあるかのやうに、『經濟學』、『經濟學者』、『效用』、『價値』などゝ言ひ出すのであらうか。教授はマルクスが、此の種の暗示でもしてゐるといふ、何か證據があると云ふのであらうか。それとも教授は、マルクスは經濟學の一著述家だつたと云ふこと以外には、讀者は恐らく何にも知るまいと高を括つて、一と山張られたに過ぎぬであらうか。これがまた彼が最初に『唯物史觀』を『歷史の經濟的說明』と取り換へた理由ではなからうか、それは一切、心あつての混同だらうか、それとも眞から混亂してゐるのか。そして教授がマルクス主義者に『一個人は經濟的

動機以外の動機によつて衝動せられると云ふことは、今更ら指摘する必要がない』と告げられたのは、何故であらうか。之はマルクス主義者自身、厭やといふほど、批評家の利益の爲めに、繰り返してはゐなかつたか。否なマルクス自身、『經濟人』をその墓に葬つたではないか。然るにマルクスの敵らは、今や再び彼をその墓から起たしめようと試みてゐるではないか。經濟學者たるセリグマン教授は、是等の事を知らなかつたでは相ひ濟まぬ。尤も『經濟人』の崩御と復活のたくらみとが、セリグマン教授の統計部に、まだ知れてゐなかつたとすれば、教授は何故に、友人ジョン・ビー・クラアク教授に問合せをしなかつたのだ。

更にまた歷史の『言語學的』説明とは、一體何を指すのだらう。それは『言語學的』慾求の結果たる、『言語學的關係』に基づくものであらうか。それから歷史の『倫理的』(それが如何なる意味にもせよ)説明の外に、別に歷史の『宗教的』説明があるのは、どうしたことか。信仰箇條的説明、乃至はお寺的説明といふ譯なのだらうか。教授は實際、『學者』が斯かる『立場』から、『過去の出來事』を『斯くの如く正當』に『考察』し得ると云ふ積りだらうか。そして教授は實際、之でも尙ほ、歷史を『科學的』に説明するの餘地があると考へるのであらうか。

この外にも尙ほ色々、セリグマン教授にお尋ねしてもよい興味津々たる問題があるが、セリグ

マン敎授のいみじくも觀察せられた通り、人生の股はしかく複雜多様であり、マルクス批評家はしかく多岐多様を極めて居ることだし、まして敎授に何等の惡意もないらしい上は、吾々はこの上、敎授の平和を妨げては相成らぬ。けれども其の前に、吾々は敎授に問はなければならぬ。敎授の出發點であつた『人類の思想を決定する』原因の探究は、一體どうなりましたかと。敎授は失念して了はれたのか。しかも之こそ、考究中の問題ではなかつたか。

人間の思想を決定する原因は何であるか。敎授が眞に歴史の科學的說明の發見に腐心せられてゐたのなら、否な寧ろ、敎授が眞に歴史を科學的に取り扱ふことを願はれたなら、この問題こそ考察すべき唯一の問題であつた。ところが此の問題こそ、正さに近時のマルクス批評家が、飽くまで回避に腐心してゐる問題なのである。そこで彼等は有ゆる種類の『立場』や、『要素』や、其の他いろ〳〵のものを引つ張つて來る。そして彼等自身は、是等のものゝ意義を限定もしなければ、說明もせぬ。しかしそれでも、歴史を科學的に取り扱ふことを不可能たらしめるといふ、大體の目的には役に立つ。此の點に於いては、セリグマンとワインゼングリューンとのように、兩極端に立つ人でも一致する。唯だ異なるところは、薄つぺらなデモクラチックの米國人は、歴史家に對しても無造作であつて、どんな立場から書いたどんな囈言(たわごと)でも、立派な科學であると云ひ、几帳面で

頑固な獨逸人は、其のうちに包含することの出來ないもの、若し包含することが出來たとしても、それは却つて歴史を荒唐無稽に陷らしめるようなものをも、一切、包含してゐなければならぬと主張して、歴史家が其の任務を全ふすることを不可能たらしめる。

ワイセングリューンは階級闘爭説に反對する。けれども其れは、斯ような闘爭が存在しないからではない。否な、今日の社會が階級に分裂して居り、そして其の階級間に闘爭の行はれてゐる事は、彼れの否なみ能はざるところであつてそ、れは尙ほ、社會の經濟的關係が、歴史の最も主要な原動力たることを否なみ得ないと同じである。けれどもセリグマンは、經濟的關係以外の他の『關係』を發見する。そしてそれ故に、彼は有ゆる種類の『立場』から歴史を書くことが出來るように、ワイセングリューンも亦た、有ゆる種類の闘爭を發見する。そして科學的歴史家は、全べて是等の闘爭を『計算に入れ』なければならぬと主張する。そしてワイゼングリューンに從へば、この闘爭は唯だに社會的闘爭ではなくて、個人間の闘爭であり、有ゆる性質と種類の闘爭である。そして是等の闘爭は、何づれも眞の歴史の形成に參與するものである。そこでワイゼングリューンの科學的歴史に對する要求は、玆に數へ盡されぬほど澤山であるが、見本の爲めに二つ三つを擧げて見ると斯うである——

『科學的』歴史家は、『直觀的』の洞察を以つて、彼れが取り扱はうとする時代の神髓を理解しなければならぬ。そして同時に、その『心理的限界』を正確に測定することが出來ねばならぬ。彼れは一切の出來事、その最も小いさな出來事すらも知らなければならぬ。彼は又た全べての文書、その最も些末な文書すらも知悉しなければならぬ。讀者が斯ような任務を、生ま優さしいものと誤解せぬように、ワイゼングリューンは、科學的歴史家を圍繞する打ち克ち難き困難に就いて、讀者に警告するの勞を取つてゐる。そして其の困難たるや、成るほど打ち克ち難きものである。というのは、ワインゼングリューンが困難な事と云ふのは、社會的の出來事や、乃至は公の文書などのことではないと云ふ事を記憶しなければならぬ。否な彼れの困難とは、如何なる種類、如何なる性質たるとを問はず、一切の個人的の出來事、重要であらうとなからうと、一切の私文書を意味してゐるのである。亭主と女房との爭論、井戸端のお饒舌り、艶書、一切のものが含まれる。一切の事に關する一切の事である。なぜならば吾々の著者は、急にデモクラチックとなつて、全べての人が歴史を造ることを主張するからである。何物といへども、歴史の進路に影響せぬほどに、しかく微力なものは無く、如何なる生活上の地位も、歴史の進路に影響せぬほどに、しかく卑賤な地位はない。之に就いて誤解のないように、彼は次の如き明白な訓戒を與へてゐる――『彼れ

（歴史家）は全べての人（その記述する時代の）を知らねばならぬ。その家族關係、その實際上の行動の徑路、並びに彼等が相互に抱いてゐる意見……何も彼も、最も細かな詳細に亘つて知らねばならぬ。』

そこで科學的歴史家たるものは、宇宙間の、自分以外の一切の物に就いて、一切の事を知らなければならぬ。民衆の有ゆる社會的關係、社會の經濟的構造、政治、思想、科學、其の他色々のものを包括するところの、社會の有ゆる集團間の相互關係を知らなければならぬ。そして歴史家は、是等の萬づの事を、微を穿ち細を盡して知らねばならぬ。

マルクス主義者もまた、全べて是等の社會的事物に關する知識を要求するが、ワインゼングリューンに至つては、全く趣きが違つてゐる。否な彼は、前述の如く綿密な科學者である。そこで彼れの要求する社會的事物に關する歴史家の知識は、一人々々の個人と、先きに暗示したような其の關係とに就いての知識に、匹敵するものでなければならぬ。例へば歴史家は、單に道具や、生産の方法及び行程や、並びに彼れの取り扱つてゐる時代に生産された品物などを知悉しなければならぬばかりでなく、彼れは全べての人々の所有する有ゆる『財貨、貨物、及び商品』と並びに一切の世帶道具、衣類、其の他現世の財寶を網羅した、實際の財産目錄を備へ付けなければならぬ。

そして先きにも述べたように、彼は是等の人々を親しく知つて居らねばならぬ。之が若し發狂した唯物論でなかつたら、果して何だらう?。

固よりワイゼングリューンは、全べて是等の不條理を知つてゐる。そこで若しワイゼングリューンにして唯物史觀の要求——自己の本領たる畑のうちでは、科學といふ稱號を專らにしようとする唯物史觀の要求——を論破しようと企てゝゐるうちに、絕對絕命の形勢を見て取つた爲でなかつたなら、彼は決してあんな事は云ばなかつたらう。ワイゼングリューンの狂氣には、方式がある。全べて是等の出鱈目は、たつた一つの目的故に、さも生眞面目に吾々の前に擴ろげられてゐる。若し歷史家に對するワイゼングリュンの要求が、不可能であるならば、そして其の不可能であるといふ事實を否定せぬ以上は、歷史を科學的に取扱ふと云ふことは、吾々が知ることの出來ぬ遠い未來まで不可能である。そこで當分の間は(そこに瑕瑾がある)科學は存在せぬ。そして誰でも彼でも、勝手な『立場』から、勝手な囈言(たはごと)を書く特權がある——。

そこで諸君の見らるゝ通り、吾々は再び、元と同じ遊戲をやつてゐる——ワイゼングリューンとセリグマン、マサリックとスロニムスキー、そして其の餘の同種族は、要するに本質に於いては同一である。重くるしい哲學的の日光の下を流れてゐても、若くは華麗な文章に蔽はれてゐても、

唯物史觀に對する反對の流れは同じ水源から發して、同じ目的地點に向つて其の進路を辿つてゐるのである。

第四章　價値及び剩餘價値

一

既に指摘したように、マルクス主義の學說體系は一個の堅固な建築物であつて、土臺石から屋根棟まで、これを全體として觀なければ正當に理解することが出來ぬ。そこでマルクスの學說の或る一部分を取つて、恰かも其れだけで、一個の完全な構造物を爲してゐるものであるかの如く批評するのは誤りであつて、その結果は必然に、有ゆる種類の間違つた結論に到着せしめる。更に又た、近時のマルクス批評家の多くがするように、其の一部分だけを受け容れて、他の部分を排斥するのは、唯だに其人が、受け容れた部分をも排斥した部分をも、共に理解して居らぬ無智を示すに過ぎないものである。マルクス主義の理論體系は、一個の全體として吟味せらるべきものである。そして少くとも其の構造上の各部分の關する限りは、全體として之を受け容れるか、全體として排斥するかせらるべきものである。

ところが、マルクス主義の『哲學』と『經濟學』とを、全然、何等の關係もないものゝ如くに取り

扱ひ、そして批評家の勝手氣儘に、その一方を受け容れて一方を排斥することは、マルクス批評家間の流行である。然しながら實際に於いては、マルクスの『哲學』なるものは、人類の歷史的進步の全行程に亘る、經濟狀態の研究から抽さ出した、一個の概括に外ならぬものである。そして彼れの『經濟學』なるものは、彼れの一般的の歷史學說を、資本制度として知られてゐる特殊な經濟組織の上に、應用したものに過ぎぬ。

この點を明かにする爲めには、マルクスは如何にして、自己の名を以つて呼ばれる學說體系の樹立を見るような大硏究を始め、また如何にして斯ような硏究方針を取つたかを知ることが、極めて必要である。そして之に就いては、『經濟學批評』の序文中に、マルクス自ら述べてゐるところは、單に一時の興味を惹くに止まらぬものである。そこで吾々は、之を讀者諸君に紹介しよう。

マルクスの云ふところに依ると、一八四二年から四三年にかけては、彼は當時のドイツで最も有力な急進主義の新聞、『ライン新聞』の主筆であつたが、森林盜伐、地產の分割、自由貿易などと云ふような、謂ゆる物質的利害に關係のある問題に筆を執らねばならぬことゝなつて見ると、今までの學問は唯だ哲學、歷史、法律學の領分に止まつてゐたので、大いに閉口した。それと同時に、彼はまた、當時のフランス社會主義の諸學派に對する意見を發表する必要を生じたが、之

に就いても餘り知らなかつた。たま〱新聞の發行者に於いても、マルクスの政府攻撃の態度よりも、もつと穩和な態度でやりたい希望であつたから、それを幸にマルクスは『書齋』に退いて、必要の知識を求めることになつた。

　彼は云ふ――『私を煩はした諸問題の解決の爲めに、先づ第一に着手したのは、ヘーゲルの『法律哲學』の批評的校訂であつた。此の著述の序論は、一八四四年に巴里で發行せられた『獨佛年鑑(ドイッチェ・フランツォジッシェ・ヤールビュヒエル)』に現はれた。私は研究の結果として、次の如き結論に到達した――法律關係にしても、國家の形態にしても、それ自身だけでは理解することが出來ぬし、また謂ゆる人心の一般的進歩といふようなことによつては、説明することは出來ぬ。是等のものは、生活の物質的條件に根柢を有するものであつて、ヘーゲルは十八世紀の英佛學者の顰に倣つて、之を『公民社會(シヴィク・ソサエテー)』の名稱の下に綜括した。そしてこの公民社會の解剖は、經濟學の中に求むべきものだといふことである。そこで經濟學の研究は巴里で始めたが、ギゾー氏の退去命令の爲めに、ブルッセルに移つてからも、尙ほ繼續した。私の到達した一般的の結論は、次の如く要約することが出來るが、この結論を得てからは、之は絕えず私の研究の主綱となつたものである。』

　その次には、マルクス説の全體系を方寸のうちに縮約し、そして唯物史觀に就いてのマルクス

自身の定式を含む、かの有名な一節が續づくのであるが、本章には直接の關係が無いから、玆には省略する。

マルクスは唯物史觀の定式を示す爲めに、一大論文を書く代りに、却つて之を、純然たる經濟學上の著書の、一小序文に委ねてゐる。この事實を見て、マルクス批評家が驚いてゐるのはなか〳〵面白い。けれども事實に於いては、これは甚だ意味深長なことであつて、少しも驚くべきことではない。この一節のうちには、マルクス說の全體系の摘要、即ち歷史上の基礎、經濟的の組織、並びに社會主義的の結果を含んでゐる。然しながら此の著述そのものは、資本制度の經濟的構造を詳細に亙つて漏らさず取り扱ふべきものであつて、社會主義的結論には力が用ひてない。マルクスは資本制度の考究から、直接に流れ出たものでない以上は、如何なる社會主義をも信じなかつたからである。そこで社會主義的結論に就いては、マルクスは單に推論の基礎を與へるに止どめ、讀者をして各々、この著書のうちにある資本制度の考究から、自分自身の社會主義を抽き出だすに任せたのである。若しこの考究が、おのづから讀者を社會主義に導かぬ位いなら、社會主義的結論に骨を折る事は無益であるか、さもなくば不當である。或は無益にして且つ不當であらう。然しながら資本制度は、歷史的見地から考究しなければならぬ。そしてこの歷史的見地を、

定式的に記述しておく事は必要であつた。歴史的見解に對する明白な理解がなくては、資本主義の生產及び分配の制度を支配する法則の考究は、七つの印を以つて封印された祕密の卷き物に均しいからである。そこでマルクスは、序文の中にその歴史的學說の定式を與へておき、然る後ち、現在社會の經濟的構造と、その特殊な進化行程を支配する法則との研究に取り掛つたのである。

經濟學者としてのマルクスに對する批評家の意見は、哲學者としての彼に對する批評家の意見のまち〳〵である如く、まち〳〵である。スロニムスキーと其の他の批評家は、經濟學に對しては、マルクスは全然、何等の貢献をもして居らぬものであつて、彼れの學說は誤謬であるばかりでなく、少しの歴史的意義すら持つて居らぬと考へる。この見解から、マルクスの功績に對する熱狂的の贊辭に至るまでの間には、色々の意見がある。云ふ迄でもなく、マルクスはその獨創を否認せられてゐる。彼れはまた或る批評家からは、英國古典經濟學派、就中、リカルドの盲從者であると非難され、また他の批評家からは、彼れは英國古典經濟學派を一般に理解して居らず、別してリカルドを理解して居らぬと非難せられてゐる。此の點に就いては、先きに述べた理由によつて茲には論及せぬが、唯だこれだけの事を云つておく――マルクスの經濟學說の多くの部分は、マルクス以前に、殊に英國古典學派によつて說明せられてゐるが、各々の部分を一つの體系

的構造に結合すること、この構造の建設に用ひられた見地、並びに此の構造の土臺石たる剩餘價値の學說、要するに斯くの如き體系は、全く之れはマルクス自身のものである。尙ほこの所に云つておきたいことは、マルクスはその歷史的見地の爲めに、當時勢力を揮つてゐた古典學派と反對の立場に立ち、これが爲めに自己獨特の經濟學說を建設するの必要に迫られたと云ふことである。古典學派は現在の經濟組織を『自然的』として、詳言すれば、その起原に就いては、歷史的發展に無關係なものとして受け容れ、その應用に於いては、最終のものとして受け容れる。そしてこれはマルクスの一層明快な歷史的理解、卽ち彼れの哲學に悖つてゐる。古典學派は資本制度を永久のものと見做し、單にその部分々々の間の關係を分析するに止まつてゐる。然るにマルクスは、彼れの特殊な見地の結果として、その部分々々の作用と、その相互關係とを探求したばかりでなく、是等の資本制度の各々の部分々々の相互關係によつて、各部分の上に生じた變化と、更に此の變化の結果として生じた資本制度全體の上の變化をも探求した。言葉を換へて云へば、マルクスは全體としての資本制度の、動學を考究した。そして之によつて得た光によつて、旣に古典派の研究した靜學の再考究を行つたのである。マルクスをして、英國古典經濟學派に反對せしめた彼れの哲學は、同時に亦た、謂ゆる心理的學說に赴くことをも妨げた。全べての心理學的學

說の根本原則である、個人的動機によつて社會現家を說明しようとする企ては、マルクスの歷史的社會學的見地とは、全然相ひ容れないものである。マルクスの歷史的社會學的見解は、社會現象を說明して、その起原と成長と衰亡とを明かにすることを要求する。然るに之は心理的個人的動機による說明の、能くせざる所のものである。

マルクスが、現在の社會組織の經濟的構造を研究するに當つて、彼れの當面した問題は、次の如き疑問に對する解答を見出すことであつた——今日の社會の富、詳しく云へば、今日の社會を組成する各々の個人の、生活と享樂との資料の泉源は何であるか。それは如何にして、また如何ように生產せられ、また如何なる要素と狀況と條件とが、その生產と保存と蓄積とに必要であるか。それは如何にして如何ように、また如何なる原則に從つて、今日の社會を組成する各々の團體や個人の間に分配せられてゐるか。そしてこの分配は、それに參與する團體や個人の關係に、如何なる影響を及ぼすか。更に斯うして生じた關係と社會現象とは、この社會の富の生產の上に、如何なる反作用を與へるか。從つて其の結果として生ずる社會の一般的運動の方向と狀態とを支配する法則は何であるか。そして此の經濟組織の歷史的限界は何であらう?。

今日の社會に於ける富を詳細に研究して見ると、注意すべき事實が現はれる。卽ち、それは全

べての富と均しく、如何なる性質の欲望であらうとも、兎に角それを生產した社會に於ける、一個人の欲望を滿す品物から成り立つてゐるものである。けれどもこの富の分量は、社會的見地から見ると、一個人が別々に、若くは社會が全體として持つてゐる品物の分量、または數によつて定まるものではない。また今日の社會の一員たる個人は、自分の欲望または社會の他の成員の欲望を滿足させ、若くは滿足させることの出來る品物を、さまで多量に持つてはゐなくとも、尙ほ且つ多くの富を所有して居ることになる場合がある。そして原則としては、今日の社會制度の下では、人々の富は、其の人自身の欲望を滿足せしめる品物から成り立つものではなく、この品物が何等かの欲望を滿足せしめるものである場合にも、それは却つて他人の欲望を滿足せしめるものである。更に人々の富は、それを組成する物質または品物に增減なくして、尙ほよく增減し得ると云ふことである。

これは歷史的に考へて、全く新規な現象である。卽ち今日の富なるものは、在來の形態の富とは根本的に異なるものであつて、全然、新規な性質と特徵とを持つことを示すものである。更に今日の富の斯ような新奇な性質と特徵とは、明白に、自然な狀態に悖つてゐる。今日の資本主義時代に先だつ如何なる時代にも、人と其の人の富——卽ち生活と享樂との手段——との間の主觀的

關係が、今日の如く全然分裂してゐたことはない。この時代に先だつ如何なる時代にも、人と其の人の富とが、今日の如く絶對に客觀的の關係、非同情的の關係に立つてゐたことはない。吾々の時代に先だつ如何なる時代にあつても、人々の富が、今日、資本制度の下に於けるが如く、それほど徹底して非個人的であり、それほど絶對に社會的狀況に隷屬し、それほど完全に社會的の力を意味するものであつたことはない。

然らば富の屬性と特質とに斯ような變化を齎した、資本主義の生產及び分配の制度の、特徵と特質とは何であるか。また此の變化は、如何にして起つたか。

資本主義の生產を特色づけてゐる顯著な特徵は、この制度の下にあつては、人は品物を生產しないで商品を生產することである。換言すれば、彼は自分の欲望の滿足に使用する爲めに、自分で使用したいものを生產しないで、自分で使用することを欲しないが、他人に引き渡すことの出來得る物を生產する。そして他人がそれを何の爲めに、また如何ように使用するかは、少しも顧みないのである。卽ち嘗て、他の生產組織の下に人々のやつてゐたように、自分自身が使用する爲めに品物を生產する代りに、彼は市場を目的として商品を生產する。そこでマルクスは、次の言葉を以つて、資本主義生產方法の偉大な研究を始めてゐる――『資本主義的生產方法の行はれ

る社會の富は、「尨大なる商品の累積」といふ形を取るが、其の單位は、一つ一つの商品である。故に吾々の研究は、先づ商品の解剖から始めねばならぬ』。この商品の解剖こそ、吾々の富を、純粹に人に對する客觀的の關係におき、そして之に純粹な社會的の屬性と本質とを與へるようになつた變化を明らかにし、斯くて資本主義生產組織の下に於ける富の、前述の如き有ゆる特徵を理解する鍵となるものである。

そこで商品の特質、卽ち普通の品物を商賣上の品物たらしめる性質は、その交換價値である。詳言すれば、其の品物を消費の目的で使用しようとする人に有用であると云ふ性質を備へてゐる以外に、更に交換し得ると云ふ性質、卽ち消費者としては入用でない人にも、交換の目的で有用であるといふ事實である。故に一つの品物の交換價値は、その品物が、結局は消費に有用であるといふ性質に基づくものではあるが、それはこの使用價値とは全く異つた別ものであつて、使用價値の千差萬別な變化から獨立して居るものである。否な使用價値と交換價値との二つの性質は、互ひに排除するものであり、相ひ對立するものであると云つてよい。卽ち或る品物は、之に使用價値を認めぬ人に取つてのみ、交換價値である。そして其の使用價値の働く時には、それは交換價値を失ふのである。或る品物を商品とするものは、その交換價値である。從つてそれは交換を

目的としてゐる間だけ商品たる性質を存してゐるが、消費の爲めに使用に供せられる場合には、この性質を失ふ。之に反して或る物の使用價値は、一方に於いては、その品物の性質そのもの存在の樣式自體に固有內在するものであつて、之が生產の社會的形態には關係せぬ。更に他方に於いては、物の使用價値は、物とそれを使用する人との間の、純粹な主觀的關係である。從つて一つの物の使用價値は、別々の人々によつて使用せられた場合には、それ〴〵の人に取つての、純粹に主觀的な價値である。この二つの方面のいづれに於いても、使用價値は經濟學の領域には這入らない。經濟學の目的は、資本主義生產組織の下に於ける富の特殊な現象——それは先きに述べたように、純粹に社會的性質をもつた現象——を說明することだからである。物の自然的性質と個人的用途とは、資本主義生產組織の以前から久しく存在して居つたが、前述のような、資本主義的に生產せられた富の性質を、富に賦與することはなかつた。是等の性質——物の自然的性質と個人的用途——は、品物の性質であつて、是等の用途は品物の充用せられる用途である。そして是等の性質は商品の性質でもなければ、商品の用途でもない。從つてそれは物の交換價値——單純な財物を變じて特殊な能力と性質とを具備する不思議な商品とならしめる屬性——には、何等の影響をも與へるものではない。但し財物は商品の基礎體であり、物質的の實體である。

そして使用價値は交換價値の基礎體であり、物質的の實體である。であるから歴史的には、財物は商品に先立ち、使用價値は交換價値に先立つて存在したものである。

そこでマルクスは言ふ――『富の社會的形態の如何を問はず、使用價値は常に、この形態には拘らないそれ自身の實體をもつてゐる。何人も小麥の味ひによつて、それがロシアの農奴によつて作られたか、フランスの百姓によつて作られたか、乃至はイギリスの資本家によつて作られたかを語ることは出來ぬ。使用價値はよし社會的欲望の目的物であり、從つて互ひに社會的に關聯して居つても、しかも尙ほ、社會の生産關係の何等の標號をも帶びては居らぬ。吾々が一つの商品を持つと假定せよ。そしてこの商品の使用價値が、ダイヤモンドのそれであると假定せよ。吾々はこのダイヤモンドを眺めたゞけでは、それが一個の商品であることは分らない。そしてこのダイヤモンドが、使用價値として用ひられてゐる場合には、賣笑婦の胸間を飾つてゐようが、硝子切り職工の手に在らうが、美術的に用ひられてゐようが、機械的に用ひられてゐようが、それはダイヤモンドであつて商品ではない。使用價値たることは、商品たることに缺く可からざる先行條件ではあるが、商品であらうと無からうと、それは使用價値にはどうでもよい。斯ようにその經濟上の落着き先きの性質如何に無頓着な使用價値――卽ち使用價値としての使用價値は、經濟學

の考究の範圍外にある……けれども其れは、吾々が交換價値と名づける一定の經濟關係の直ぐ下に横はつて、その物質的の基礎をなしてゐるのである。』

そこで今日の富は、斯ような點に於いて、今日以前の富とは異なつて居り、資本家的の富として區別せられるものである。そして斯ような意味で、今日の富なるものは、交換價値の聚合物である。言葉を換へて云へば、今日の富は、それが單に消費の爲めに使用せられるばかりでなく、資本家的性質を保有してゐる限りは、資本であり、交換價値の聚合物である。交換價値なるものは、自然的存在の要素若くは條件として、物それ自身に固有するものでないことは、吾々の既に見たところである。吾々はまた交換價値は、それを交換價値として使用する人に取つては、何等の主觀的關係をも有しないと云ふこと、また交換價値は、其の人の行爲不行爲の上に懸るものではなくて、之を生産した社會の内部に於ける、個人と個人との間の社會的關係から生じた客觀的の屬性であるといふことを見た。そこで吾々は、斯う結論しなければならぬ――交換價値の聚合物たる資本は、單に個人間の社會的關係に過ぎないものであつて、その性質――資本は斯ような交換價値の聚合物であればこそ、この性質を持つ――は社會關係の結果であり、また社會關係の表現に外ならぬものである。

然らば交換價値とその集成物——資本——が代表してゐる社會關係とは何であるか。交換價値と資本との性質は何であるか。そして是等のものゝ存在を支配する法則は何であるか。そして是等のものは、如何にして社會關係の裡から生じ、如何にして社會關係に支配せられるか。マルクスに從へば、是等の問題に答へることが、卽ち經濟學の目的であつて、彼れの生涯の事業は、之が研究に捧げられたのである。

けれども吾々は此の研究に入る前に、先づ吾々の當面してゐる問題を明瞭にし、そして吾々に解答を求めてゐる疑問を、明かに限定しておかねばならぬ。吾々は既に、今日の富を、從前の如何なる社會制度の下に於ける富とも異なるものとする、或る特徵を指摘した。そして是等の特徵は、今日の富の形態は、今日の特殊な社會關係の產物であることを明らかに示してゐる。けれども說明を要するのは、獨り是等の特徵だけではない。現在の經濟組織を一寸研究したゞけでも、價値から成り立つてゐるところの今日の富が、神祕に滿ちてゐることが分るだらう。そして是等の神祕は、たゞそれだけを考察したのでは、說明し得られぬものである。

今日の富は、それを組成する物質的實體の增減には關係せずに增減すると云ふ、特殊な性質を備へてゐることは、前に述べた通りであるが、今日の富の起原を取り卷いてゐる祕密は、此の一

事によつて暗示せられてゐる。更にこの祕密は、吾々が現代社會に於ける富の生產の研究に進むと、一層深くなり、分配の考究に進むと、更に一層深くなる。そこで玆には問題の性質を明らかにする爲めに、資本主義的國民の富の性質の研究者を當惑させる最も特徵的な、幾つかの現象を述べるに止どめよう。

前述の如く、今日の富の分量は、それを組成する品物の增減には無關係に增減するものであつて、此の事實は明らかに、價値が一種外部的のものであり、是等の品物の性質及び用途から獨立したものであることを示してゐる。けれどもまた、價値としての富は、その物質的實體から獨立してゐると云ふ事實のうちには、兩者の間に密接な關係のあることが現はれてゐる。尤も此の關係は、既に指摘した使用價値と交換價値との間の對立關係の性質を帶びるもので、寧ろ敵對の關係であることは事實であるが、それにも拘らず、兩者の關係は明かに定まつて居り、其の性質は——他の學術的研究の領分から實例を借るならば——恰も兩極の關係に似寄つてゐる。卽ち使用價値の累積と交換價値の累積との間の差異は、不斷に增大してゐることが觀取される。言葉を換へて云へば、價値の分量と、之を組成する物質的實體の分量との間の差異は、不斷に增大し行くことが觀取せられるのである。更に詳しく云へば、品物の生產が增大するに伴ふて、この商品は

價値を減少する。斯くて吾々の『自然』の富の增加が大なれば大なるほど――換言すれば吾々の社會的の富、若くは價値としての富の蓄積を形成するところの、有用な品物の增加が大なれば大なるほど――この社會的の富若くは價値としての富の價値の增加は、遞減するのである。更に言葉を換へて云へば、吾々の價値としての富の增加は、不斷に且つ系統的に、之を組成する物質的實體の增加に遲くれて行くのである。此の事實は明かに、物の價値はその自然の性質、若くはこの品物を振り向けることの出來る用途に懸かるものではなく、從つて交換價値は、全然、使用價値から獨立したものではあるが、しかも尙ほ、少くとも此の二つのものの生產には、其の間に確乎たる一定の關係があることを示してゐる。然らば此の關係は如何。

今日の富の生產といふ問題は、唯だ不思議といふに過ぎないが、其の分配の問題になると、更に不可解の極みである。今日の社會制度は、ちよつと見渡したゞけでも、吾々の社會には、明白に何等の富をも生產しない多くの人々が、却つて有り餘るほどに富を擁してゐることが分る。否な、吾々の富の大部分は、生產しない人々の所有に歸してゐる。彼等はそれを、何處から得たか。此の疑問に對しておのづから浮んで來る解答は、それを生產した者から獲たといふことである。そこで疑問が起つて來る――如何にして彼等はそれを獲たのであらうか。彼等はそれを、暴力によ

つて獲たものでもなければ、されぱとて、愛情の爲めに與へられたものでもない。彼等は如何にしてそれを獲たのであらうか。

人間が自分自身の行動の記錄を保存するようになつてから此の方、絕えず社會には、勞作もせず勞働もしないで、しかも能く、地上の美味に生活することを知る人々から成り立つ社會的階級があつた。然しながら是等の人々の所業は、何時でも大つ平らでありむき出しであつて、萬人共に、彼等の遣り口を明からさまに見ることが出來た。彼等の滋味は何處から來、そして彼等は如何にして其れを手に入れたかに就いて、そこには何の祕密もなかつた。富はこれを生產した者と生產しない者との間に、白晝公然、甚だ單純な手續きで分配された。そこで各々の生產せられた品物は、最後の所有者の手にまで辿ることが出來るし、各々の所有せられてゐる品物は、逆さまに最初の出所にまで、溯ばることが出來た。古代の奴隸所有者や、乃至は中世の封建諸侯の富の出所は、子供といへども知つてゐる。ところが今日の非生產階級の富の出所は、そう行かぬ。吾々の紳士豪商の富の出所は、神祕に包まれてゐる。手堅い商人は、その商品に對して値段だけのものを支拂ひ、値段だけに賣るものと思はれてゐるし、又た普通には、そうして居る。然らば彼は、何處から其の利潤を獲るだらう。二人の人が取引をして、同量の價値を交換する。何故ならば、

彼等は手堅い商人で、互ひに瞞まし合ふことはせぬ。しかも二人とも利潤を收める！。彼等の利潤は何處から來たらうか。或る馬鹿者は、商人は最も安い市場で買つて、最も高い市場で賣る、斯くて利潤を作ると考へる。

けれども、之は明白に誤りである。勿論、或る商人はその仲間を欺いて、餘分の利潤を收めることも出來る。然しこの場合には、その仲間は、彼れが得をしたゞけ損をする。けれども商人の規則正しい利潤は、品物を正當の價値で買ひ、正當の價格で賣る場合に出來るものであつて、全べての商人が、均しく儲けてゐるのは其の爲めである。さもなくば資本家は、お互ひ同志で喰ひ合つて、一人が儲けるだけは、他人が損失をすることになつた筈である。斯くて富は、資本家階級の人々の間を流動するだけで、何等の純益をも生じないだらう。彼等はお互ひに洗濯物を引き受け合ふことによつて生活することの出來ないように、お互ひの損失によつて生活することは出來ない筈である。ところが資本家階級は、能く生活し、繁昌し、そして莫大の富を蓄積することすらも能くしてゐる。然らば資本家階級は、何處から之を得るのであらうか。

更に別の說明は斯うである――商人は賣買によつて其の品物の價値を高める。この高めたゞけの價値は、卽ち商人の利潤である。また商人の利潤は、生產者と消費者との間の、仲介の勤勞に對

する報酬である。然しこの後ちの方の提案は、玆には問題外である。なぜならば吾々の考究しようとするのは、商人はその得る所のものに値ひするや否やといふ、倫理問題ではなくて、彼は何處から、又た如何にして之を獲得するかと云ふ、純粹に機械的の問題だからである。更に又、商人は品物の價値を『高める』と云ふ說明、卽ち商人は品物を賣ることによつて、新たに價値を創造すると云ふ說明も、彼は何處から、又た如何にしてそれを獲得したかと云ふ、此の疑ひの解答にはならぬ。單に所有者が變ることによつて、如何にして商品の價値が『高められる』であらうか。所有者は變つても、商品の自然的性質は、依然として同一であり、その用途も、依然として同一である。一體この價値は、商人が之を獲得する以前には、何處にあつたらう。誰が之を生產し、そして何故にその生產者は、之を手放したか。若し單に持主を變へることが、價値を創造するならば、旣に持合せてゐる品物を廻り持ちにする、遙かに容易な方法で價値は得られるのに、何を苦しんでか或る人々は、新たに品物を生產して價値を獲得しようとして、愚かにも額に汗をして勞作するのであらうか。之は再び吾々を次の疑問に引き戾す――交換價値とは何であるか。それは如何にして生產され、若くは獲得せられるか。

マルクスの價値及び剩餘價値の學說は、如何に是等の全べての疑問に答へ、是等の全べての祕

密を明かにするか、そしてマルクスの學說こそ、斯ような經濟學上の問題に滿足な解答を與へ、そして經濟學を眞の科學とする唯一の學說であるといふことは、議論を進めるにつれて、おいおく明かにしたいと思ふ。吾々は亦た、過去に於ける人類の歷史を形成する種々なる經濟の連鎖の中に、現在の經濟制度が如何なる地位を占めてゐるかを見、更に將來の發展が、何處を指してゐるかを見たいと思ふ。吾々はまた折にふれては、如何にベルンシタインとその祖述者の言ひ分が、全然取るに足りないものであるかを見たいと思ふ。彼等はマルクスの、價値學說の神髓を理解せぬ。それ故に彼等は、經濟學の大家連から放たれた反對批評の分量に氣を呑まれ、價値學說は、マルクスの社會主義體系に缺く可からざる要素ではないと云ふ反駁の蔭に匿れようとしたものである。そして吾々は最後に、かのボエム・バワーク以下の、乃至は以上の、是等の博學な批評家の多くが、如何に不條理を極めたものであるかを見たいと思ふ。

二

マルクスは、その『無哲學』の研究方法を忠實に遵奉して、最も『無哲學的』な現實的の行き方で、交換價値の眞實の法則を發見する仕事に着手した。マルクスは、價値の法則は現代の經濟

組織を理解する鍵となるが、この法則そのものは、唯だ現今の生産と分配との、日常の實際的事實の觀察からのみ、抽き出されるものであると論じてゐる。そして是等の事實を、適當に理解し評價する爲めには、之を歷史的聯絡のうちにおき、本來の歷史的位置において吟味しなければならぬ。

資本制度の生產と分配とは、標本的の資本主義的商品――工場生產物――の研究によつて、最も能く理解することが出來る。資本制度は、それが行はれてゐる全べての社會の、全べての生活の方面にその印象を與へ、何物といへども――それが本來、資本制度の版圖に屬してゐようとゐまいと――この影響から免かれることは出來ぬ。けれども、資本制度の特徵と根本要素とを、その純粹單純のまゝで含んでゐるものは、唯だその歷史的の體現たる工場生產物だけである。工場生產物は、資本制生產が歷史の舞臺に現はれると、その技術上の體現として、之に伴ふて現はれたものであつて、卽ち資本制生產の歷史的形態であるが、唯だにそればかりでなく、同時にそれは、資本主義的社會に於ける、商品の大多數を代表するものである。工場生產物は、其の出處と性質とを、絕對に見誤まることの出來ないほど、それほど深刻に、資本主義の印象を刻まれて居り、それほど完全に、資本主義以外の生產形態との、混淆を脫してゐる。然るに他の生產物はそう行

かぬ。例へば農產物を見ても、唯だその農產物であるといふ生產上の事實だけでは、それが資本制度の下に生產せられたか否かを言ひ當てることは出來ぬ。これは今日の土地の所有と耕作との形式が、現代經濟の一般的進步から、甚だしく遲れてゐるといふ事實に基づくものである。そこで吾々は、農產物を吟味したのでは、資本制生產の特徵を闡明することは出來ぬ。なぜならば吾々は、農產物の何づれの性質が、資本主義の結果であつて、何づれの性質が、資本主義以前の生產樣式の殘存物であるかを識別し得ぬからである。吾々は資本制生產の特徵を學んでみると、斯ような特徵は、資本主義的に生產せられた農產物の中にも、發見せられることを知るだらう。であるから農產物の研究は、資本制生產の法則の、限界を見出す手引きになるが、之によつて法則そのものを知ることは出來ぬ。そして法則そのものを發見する爲めには、吾々は工場生產物を研究しなければならぬ。

これに關聯して記憶すべきことは、資本制度は歷史的には、農業の廢墟の上にその土臺に築ついたものであつて、兩者の進步は、普通には、互ひに相ひ反比例するといふことである。資本主義の社會はその存續の爲めに、農產物を必要とするにも拘らず、耕作事業は、却つて資本制度の計畫に副はぬといふことは、資本主義的社會の矛盾の一つである。例へば、英國のような標本的な

資本主義の國にあつては、斯ような矛盾は事實上農業を絶滅し、外國から食糧の供給を受けることによつて解決されてゐる。けれども之は明白に、資本主義の世界全體に對する解決法とはなり得ないから、そこで農業を資本主義化しようとする企てが行はれた。尤もこの企ては、今迄のところでは、唯だ中途半端の成功を見たに過ぎぬ。これが今日、全べての經濟上の議論に、謂ゆる『農村問題』が最も喧ましい所以である。そこで資本制度を理解しようとするならば、吾々は工場生産物を硏究しなければならぬと云ふことは、以上によつて充分明白である。

一つの自然現象としての工場生産物を、農産物と對立させる最も特徴的な性質は、それが比較的、氣候や其他の自然現象から獨立してゐる點である。そして斯ように自然現象から獨立してゐることが工場生産物を事實上、自由に複生産の出來得るものとする。農産物の良好な生産は、土地や氣候のいろ〳〵な條件(この條件は、概して人力を以つて變化し得られぬものである)に懸るものであつて、從つてその生産は、萬人の服從せざるを得ない力によつて限定されてゐる。然るに工場生産物は、自由に之を複生産する人間の外には、何等の命令者をも有しない。工場生産物の限界は、自然によつて定められてゐるものではなく、人間によつて課せられてゐるものである。

即ち工場生産物の生産は、『市場』の需要に從つて、增しもすれば減りもする。詳言すれば其の限

界は、生産物の分配の上に於ける、社會の成員間の關係によつて定まるものである。此の點に於いて工場生産物は、資本制度の代表的な生産物である。資本制度の降臨と共に、貧富は自然的の狀態ではなくなつて、一つの社會的關係となつたのである。

そこで吾々は、工場生産物がその一生涯に經過する、自然的の徑路を追ふて見よう。先づそれが生産される模様と、終局の到着點たる消費に至るまでに、流通の間に取るところの徑路を吟味しよう。そして何人が其の生産に携はり、其の流通の道具となり、其の分配に與かるかを見たいと思ふ。

どんな工場生産物でも、試みに傳記を書いて見ると、その一代の物語は、大凡そ次の如きものである――

先づこの生産物は、製造業者の所有するか、または賃借してゐる一大工場で造られる。それは同一製造業者に傭はれる多人數の勞働者によつて、製造業者の當てがつた材料で、製造業者の所有する機械で造られる。そして製造業者は、彼等の勞働に對して支拂ひする。そこでこの工場生産物が出來上つて、用ひられるばかりになると、それは卸商人に向けて送られる。卸商人は製造主から買入れて、今度は之を小賣商人に賣る。小賣商人の手から、それはまた買手たる消費者の

手に渡る。之が普通の道行きである。無論この徑路には色々の變化がある。例へて見れば、製造業者が直接に小賣商人に賣る場合には、卸商人は拔きになる。また實際には、いよ〳〵消費者の手に入るまでには、まだ〳〵多くの賣つたり買つたりが行はれよう。然しながら其の生涯の道中が、製造、賣買、消費といふこの三階段を經るといふことだけは、間違ひがない。

そこで工場生產物の存在と、そのいろ〳〵な變化とに影響を與へる人々、何等かの道でその分配に關與する人々、一言にすれば、工場生產物の一生涯の道程に於いて、遭遇する人々は誰であるかと云へば、次の通りである——但しその生產に用ゐた原料品の生產と分配とに關係した人々は別である。そして是等の原料品そのものも、一つの工場生產物であるかも知れぬ——卽ち賃銀を受けて其の生產に從事する勞働者。生產をさせ、生產費を支拂ひ、そして商人から代價を受取る製造業者。それを買入れて轉賣し、利益として差額を收める商人。最後に代價を拂つて買ひ、消費の爲めに保管する消費者。但しこの消費には個人的、非生產的のものもあるし、更に他の工場生產物の生產を目的とする非個人的、生產的のものもある。尙ほ此の外にも、製造業者はその工場の敷地に對して、地主に地代を拂ひ、その資本金に對して、銀行家に利息を拂ふ場合もあるし、商人も地代や利子や、手傳ひに對する報酬を拂ふたかも知れぬ。また生產物が究極の到着點

たる消費者の手に達するまでには、或る場所から他の場所へと運搬する爲めには、時間と勞働とが費やされたらう。そして全べて是等に對しても、支拂ひをしなければならぬ。

そこで吾々の工場生產物の生產と流通とに關與した人々と、是等の人々がお互ひに配け合はなければならぬ人々とは、共に吾々の工場生產物の配け前、卽ち究極の消費者の支拂ふ代價の配け前に預らねばならぬ。そこで今度は、此の分配が、どんな按排に行はれるかを見よう。

さきにも指摘した通り、現在の制度の下にあつては、是等の人々は、おの〳〵當然に受く可きだけのものを受けてゐるものと見做さねばならぬ。なぜならば彼等は全べて正直な人間と見做されて居り、他人の損失によつて利益を得る場合は例外であつて、且つ彼等は皆な、何等の强制をも蒙らぬ、自由な行動者であるからである。勞働者は働かうと働くまいと「自由」であり、製造業者と商人も、雇はうと雇ふまいと、買はうと買ふまいと、賣らうと賣るまいと、同じく自由である。資本制度はその本來の發達をする爲めには、人身上商業上の、絕對の自由を必要とする。そこで玆でも、絕對に自由なものと假定する。そこで各人の配け前は如何にして定められ、又た何時生產せられ、何時引き渡されるであらうか。

但し玆に記憶すべきことは、生產、分配、流通に關係した者は、何人もその生產物の實體には

興味を有しないこと、即ちそれを所有しようといふ欲求をもつては居らぬことである。彼等のうちの何者も、物質的に、その生産物の分配に預かるものはない。即ち彼等の配け前は、その究極の消費者が支拂ふ購買價格の配け前である。そしてこの消費者は、生産物を『市場』から取り出し、之を一個の商品から、單に使用價値といふ自然的性質を持つた唯だの品物に變化する。言ひ換へれば、彼等のめい〳〵の配け前は、商品の交換價値から出て來るものであつて、この交換價値は、究極の消費者に賣られることによつて、交換の一般的媒介物——即ち貨幣——に變化するのである。

この交換價値は、製造業者が生産物を賣るばかりにして、その目的とする市場に出した時に、始めて現はれるものである。製造業者は、使用價値を目的として製造したのではない。彼れは少しも、この品物が自分には入用がない。又た自分で使ふ考へもない。之に反して、彼れはその交換價値を目的として生産したものであつて、それが出來上るが早いか、直ちに之を販賣若くは交換の爲めに提供する。斯くて製造業者は彼れと同樣に、自分自身には絶對に入用でもなく、また使用しようともせぬ人に賣渡す。この買手は、製造業者がそれを製造したのと、同じ目的で買ふのである。彼れがこの生産物を買ふのは、其の內に交換價値があるからであつて、尙ほ其の上に、